

令和 2 年度

生活文化調査研究事業(華道)

報告書

文化庁地域文化創生本部事務局

令和2年度生活文化調査研究事業(華道)報告書

序 本調査研究事業について	1
1章 華道の概要及び歴史について.....	2
1節 華道の概要.....	2
2節 日本における華道の歴史の変遷.....	6
3節 現代における華道の現状と社会的な位置付けについて.....	10
3-1 暮らしの中の華道について	10
3-2 華道に関する国民意識調査について.....	14
3-3 現代における華道の社会的な位置付けについて	19
4節 学校の授業及び部活動などで行われる華道について	23
2章 華道分野の活動について.....	26
1節 華道団体の活動について	27
1-1 華道団体等へのアンケート調査の実施概要.....	27
1-2 華道団体等へのアンケート調査結果概要	28
1-3 まとめ	38
2節 華道教室の活動について	40
2-1 華道教室へのアンケート調査の実施概要	40
2-2 華道教室へのアンケート調査結果概要	41
2-3 まとめ	49
結 本調査研究事業のまとめ	51
参考資料 文化創造アナリスト(華道)及び有識者会議検討経過	55
参考資料 花材や道具について.....	56
参考資料 国民意識調査の結果.....	63
参考資料 華道団体等アンケート調査配布先.....	69

序 本調査研究事業について

1 調査事業の目的

文化庁では、平成 27 年度以降、生活文化を把握するための調査研究事業等を行っている。平成 27 年度は、生活文化の保護を検討していくための調査研究を、また、平成 29 年度から令和元年度までは、文化芸術基本法及び文化芸術振興基本計画に基づき、生活文化等の振興策を検討するための調査研究を行った。

今年度実施した本調査研究事業は、これまでに実施した上記調査結果等を基に、生活文化分野の中でも華道についてより詳細に実態把握するための調査研究を行うことによって、生活文化分野の保護・振興策の検討に資することを目的としている。

2 調査事業の概要

本事業では、華道がおかれている現状等について詳細な実態把握を行うため、

- ・華道の概要、成立や変遷を把握するための文献調査
- ・華道への興味関心等に関する国民意識調査
- ・華道の団体・流派（以下この報告書では「華道団体」という。）へのアンケート調査
- ・華道教室（華道指導者）へのアンケート調査
- ・花材や道具の関係業者等へのヒアリング調査

を行い、3回の有識者会議の開催を経て報告書としてまとめたものである。

なお、今回の調査では、花材や道具に関する調査が十分に行えず網羅的な調査にならなかったことから、これらの調査結果は参考資料への掲載にとどめた。

1章 華道の概要及び歴史について

1節 華道の概要

華道について

今日の日本において、草木や花を花瓶に挿す伝統的挿花文化は「華道（花道）」、あるいは「いけばな（生花、活花、いけ花など）」と呼ばれている。これらの用語の定義は曖昧であるが、本報告書では生活文化の一分野の総称としては「華道」という呼称を用いることとする。また、挿花に伴う動詞に関しては、後述の各様式に応じて「立てる」、「入れる」、「生ける」などの語が使い分けられるが、華道全体に関する場合は「挿す」を用いる。

華道はいわゆる芸道、つまり、芸術と道とが結びついた文化の一つである。華道や茶道における「道」とは、単なる分野や領域といった意味ではなく、「求道」という言葉に見られるような精神的な高みを目指す過程を意味している。華道の場合、室町時代に挿花に関する伝書（花伝書）が登場して以来、しばしば挿花は「さとり」と結び付けて考えられてきた。これは、挿花という、自然を再構成する営みを通して、自然と人間との関係を自覚するという思想である。華道がいわゆるフラワーアレンジメントと異なるのは、その目的が作品制作のみならず、挿花の過程に重点が置かれている点にあるといえる。これら求道的な要素だけではなく、神道や仏教につながる宗教性、部屋を飾ることを目的とする装飾性、近代以降に盛んになった自己表現を主とする芸術性など、多様な要素が今日の華道という文化に内在している。

華道の世界には伝統的に様々な様式がある。中世以来、花が飾られる空間が変化する過程で、空間に応じた型が形作られたのである。型の成立と多様化に伴い、花を扱う技術も蓄積されてきた。また、どのような場面で用いられるのか、その場合どのような決まりがあるのかといった慣習も蓄積された。あるいは花器や花鉢^{はなぼさみ}といった道具も、華道文化を構成する不可欠の要素である。そして、これら華道文化の基盤となっているのが流派である。今日においても、数多くの流派が活動しており、技術や理論や知識を学び体得していくための稽古・教授が行われている。以下では、華道文化を構成するこれらの諸要素について確認していきたい。

様式と技術

華道文化は花を挿す文化であるが、そこには歴史的に形成されてきた様式が幾つか存在する。抛入花^{なげいれ}や茶花^{ちさな}では草木の自然の姿、すなわち出生^{しゅっしょう}を生かして自由に挿すことが求められる。一方、立華^{りっか}や生花^{せいかな}といった様式は、草木の自然の姿を重視しつつも人為的なデザインである型を有している。これらの様式では出生が重視されると同時に、人工的な型が求められるのである。

例えば、立華様式の場合、伝統的に「七つ道具」と呼ばれる七本の役枝（役割を持った枝）があり¹、用いられる草木や花の配置の基本的な規則が決まっている。また、生花様式の場合は「天」、

¹ 七本の役枝は時代や流派によって異なるが、例えば真^{しん}、副^{そふ}、請^{うけ}、正真、見越、流枝、前置。また九本などの場合もある。

「地」、「人」を象徴する三本の役枝があり²、これに則した形で草木や花を挿す³。また、ほかの多くの芸道と同じく、華道にも真・行・草の区別がある。立華様式では中心的な役枝である真をまっすぐに立てる直真が「真」、真を左右どちらかに曲げる除真が「行」、そして、砂を入れた鉢を用いる砂之物が「草」とされてきた。生花様式では、流派にもよるが、「天」の枝の曲がり具合によって真・行・草を分けることもある。この場合、曲がり少なく直線に近いのが真、大きく湾曲するのが草、その中間が行となる。

このように伝統的に型を有するのは立華と生花であり、抛入花や茶花、あるいは文人花や瓶花と呼ばれるスタイルには基本的に型はないが、今日では稽古用にある程度の定型を設定している場合もある。また、近代以降に隆盛した盛花にも、様々な型がある。いずれも草木や花をいかに挿すかという点を目的として、法則性や規則性を整えたものが花型として結実している。もっとも、一定の決まりごとはあるが特定の型は見られない自由花のようなスタイルもある。

立華や生花など型を持つ様式の場合、自然の草木の姿形を型に合わせる必要がある。ここにおいて、枝を成型する技術が求められる。枝を曲げることを「撓める（矯める）」といい、両手の親指で押して曲げる方法や、曲げる部分に花鋏で切り込みを入れて曲げる方法、熱湯や火などで花材を温めて曲げる方法など様々な技術が存在する。また、水仙や杜若などでは、「葉組み」が行われる。自然に組み合わさった葉を一旦ばらして、型に沿って再び葉を組み上げるというものである。ここには自然を人為によって再構成するという華道の理念が明確に表れている。

このような造形の技術と並んで、花を長持ちさせる保存の技術、すなわち、「水揚げ」も重要である。特に、儀式の花においては、花を長持ちさせることが最重要の課題であった。伝統的な花伝書にも水揚げの秘伝が記されており、水に酒やミョウバンを混ぜるなどといった工夫がなされてきた。現在の花展においても、作品を長持ちさせることは重要な課題の一つであり、専用の薬品の使用を含め、様々な工夫がなされている。

用途と場所

華道の挿花はどのような場面で用いられてきたのであろうか。代表的な花伝書の一つである『仙伝抄』には、元服の花や入院（出家）の花、移徙（引っ越し）の花、あるいは陣中の花などが記載されている。このようなイベントの機会に花が挿されてきたことが分かる。また、元服の花には譲葉など縁起の良いものを用いる、移徙の花には火事を連想させる赤い花を用いないなど、場合ごとの禁忌（タブー）も定められている。このようなルールの集積が、華道文化の形成につながった。

華道文化が形成された中世以降、その作品が置かれたのは現在の床の間にあたる押板などの場所である。代表的な飾り方は、三幅の軸を掛け、その前に燭台、香炉、そして花瓶の三具足を並べるといったものであった。三具足の飾り方において、花瓶は中央ではなく向かって左側に置かれた。その結果、掛け軸や香炉と干渉しないように反対側（向かって左側）に枝を伸ばすという規則が生まれ、これが華道作品の特徴である左右非対称性の源流となった。ここで挿された花は立て花と呼ばれるもので、先述の立華の原型である。これらの歴史的展開については、次節におい

² 「天、人、地」の枝は、流派によって「体、用、留」、「真、副、体」などとも呼ばれる。

³ 流派によっては五本などを用いる場合もあるが、多くは三本を基本としている。

て言及する。

今日でも、例えば床の間に生花を飾る場合や、洋間に盛花や自由花を飾る場合など、挿花は主に住空間に飾られる。あるいは料亭やホテルなどの迎え花、イベントなどの舞台花として大型の花が置かれる例や、寺社で行われる献華式のような例もあり、様々な空間において挿花が飾られている。また、華道流派や華道を習う人々で構成される社中などでは、花展として作品を展示することも多く行われる。デパートなどで開催される花展は、華道を習っている人々にとっては日頃の稽古の成果を確認し他者の作品を見て学ぶ機会として、華道を習っていない人にとっては華道の世界を垣間見ることができる機会として機能している。

花材と道具

華道の作品は空間と一体化したものであるが、作品そのものは花と花器によって構成される。華道に用いられる花は、一般に花材^{かざい}と呼ばれる。伝統的な花伝書には「十二月の花」や「五節句の花」といった項目があり、どの時期にどの花材を主に用いるかといったことが記されている。例えば、一月には松、五月には竹、七夕には仙翁花^{せんわうげ}、といった具合である。

華道においては、松などの常緑樹、あるいは枝や実など花きではないこれらの植物も、「花」、「花材」と呼ばれる。また、花材の中でも、幹や枝など木質のものを「木もの（枝もの）」、草本が主体となっているものを「草もの」、竹や藤などを「通用もの」と分ける場合もある。葉の形状に応じて「大葉もの」、「長葉もの」といった区別もなされる。伝統的な華道作品では基本的に国内の植物が花材として用いられるが、近年では外国産の植物が使用される場合も多い。また、流派によっては金属や石などの無機物を積極的に用いる場合もある。

この花材を用いて華道の作品を制作するのに必要となる主たる道具として、花器がある。伝統的な座敷飾りにおいて、三具足の花には土拍子口^{どびょうしくち}⁴と呼ばれる形状の花器を用いるのが基本であった。これは金属製であるが、そのほかにも焼き物、あるいは竹花器や籠花器なども盛んに用いられてきた。特に、竹花器はその切り方によって、「二重切」、「鮫鱗」、「旅枕」などといった種類が豊富にある。近年ではプラスチック製の花器なども使われる。

花材を切るための花鋏や花材を花瓶に固定する花留^{はなどめ}も華道文化には不可欠である。花鋏は大きく分けて、柄の先が小さく丸まっている蕨手鋏（池坊系、未生流系など）と、持ち手が輪っか状になった蔓手鋏（古流系など）がある。刃物では、この花鋏のほかに鉋^{なた}や鋸^{のこぎり}なども用いられる。

花留には伝統的に藁の束（込み藁）が用いられてきた。花器に藁の束を差し込み、その藁に立て花や立華を挿して立てるという方法である。近世中後期になると生花様式が盛んになるが、足元が垂直な立華と異なり生花は足元が斜めに傾斜しているので込み藁では固定できない。そのため、Y字型の又木^{またぎ}や薬研^{やげん}を模したものなど、花材を固定する仕組みに工夫がなされるようになる。水盤など広口の花器の場合は花留が見えるので、七宝^{しっぽう}や蟹型、観世水型など趣向を凝らした風流な花留が用いられてきた。明治以降になると剣山が広く使われるようになり、近年ではフローラルフォームが普及するようになった。

⁴ 口が外側に広く反った形状の花器。銅拍子口、調拍子口とも書かれ、あるいは手拍子口とも呼ばれる。

華道の流派と団体

華道の世界において活動の主体となっているのは、多様な華道流派である。流派に属さずに独立して活動している華道家も存在するが、多くの人は何らかの華道流派に所属している。流派を超えて横断的な活動を行っている全国組織である公益財団法人日本いけばな芸術協会には 268 の流派が所属しており⁵、このほかにも数多くの流派が華道流派として活動を行っているものと考えられる。このような現状であることを踏まえ、特に、本調査においては華道流派とそこに所属し活動を行っている華道指導者の教室活動を中心に調査を行っている。

華道流派の多くでは、家元を頂点とした家元制度を組織してその活動を行っている。家元は、流派における流儀を継承する者であり、華道指導者の養成を行うとともに免状の発行権を有し、流派の組織運営全体を統括する役割を持っている。この家元の活動を支える華道指導者らによって、型や技術の伝承など各流派の組織的な活動が維持されている。流派では、華道指導者向けの研修会や講習会、流派に所属する者を対象にした機関誌や広報誌などの発行も行われている。

流派を超えた活動もしばしば行われており、作品を展示し鑑賞する催事である花展も、流派や流派支部等による主催のほか、日本いけばな芸術協会や地域団体の主催による超流派的な花展が開催されている。超流派的団体としては日本いけばな芸術協会のほか、昭和 31 年（1956）に設立された一般社団法人いけばなインターナショナルがある。いけばなを通じた日本文化の紹介と国際的な交流を目的とするもので、現在では世界各地に 143 の支部（日本国内に 13 支部）がある。

⁵ 令和 2 年 12 月末現在。

2節 日本における華道の歴史の変遷

華道の起源

華道文化の起源としてまず挙げられるのは、宗教的な花文化であろう。日本古来の在来宗教である神道において、常盤木⁶を中心とする草木は、山や岩などととも神の依代^{よりしろ}として崇められた。このような草木に聖なるものが宿るという考え方はその後の華道文化にも継承されてゆく。

6世紀に大陸から仏教が伝来した後、日本の宗教文化は神道と仏教が融合的に併存することになる。仏教の伝来とともに仏教儀式に関連する花の文化、すなわち、供華^{くげ}が伝わった。供華は仏前に供える花であり、また、仏の空間を装飾する花である。常盤木を直立させることを典型的形式とする依代と異なり、供華では色鮮やかな花々が装飾的に挿された。そのために供華では古くからしばしば絹などの造花が用いられた。さらに、供華では花器の使用が一般化するとともに、造形的に花を挿すということもなされるようになる。このような花器と造形の文化は、その後の華道文化の形成の重要な前提となる。

このような二つの宗教的起源と並んで、古代の人々によって世俗的に観賞された花文化も存在した。9世紀、嵯峨天皇によって始められた「花宴の節」⁷は、その後の平安時代における花文化展開の基礎となる。王朝文学の『伊勢物語』には客人をもてなす席で大きな藤を挿した話、『枕草子』には勾欄^{こうらん}のもとに背丈ほどの桜を瓶に数多く挿した話が記されている。

このように平安時代の末期までには、すでに後世に華道と呼ばれる文化の源流として、上記の三つの流れ（依代、供華、観賞）があったことが分かる。図式的に言えば、これらの流れが融合して、華道という文化が形成された。

華道文化の形成

古代の宗教的、そして、世俗的な花文化が融合する結節点の一つとなったのは、中世に形成された座敷飾りであった。武家が主役となるこの時代、会所^{かいしょ}と呼ばれる寄合^{よりあひ}の場が発展した。主に連歌会などを催す場である。また、中世前期には、唐物花瓶^{からもの}を観賞する花会（花勝負、花合^{はなあわせ}）も盛んに催された。古代に形成された花文化が、中世になって室内装飾や花器鑑賞といった周辺の文化、あるいは大陸文化とも結びついて、華道が誕生したといえる。

室町時代の中頃になると、挿花に関する人物の名が記録されるようになる。これは、花を挿すことに優劣が問われるようになり、その結果「花の名手」とみなされる人物が生まれてきたことを意味している。15世紀中頃には、中臈藏主^{ちゅうらうざうす}や専慶といった人物の名が見える。応仁の乱後になると、京都に幾つかの花文化の中心地が形成されるようになった。まず、宮中では、大沢久守という人物が活躍していた。彼は宮中の部屋を装飾する花を挿すとともに、用いた花材や作品の構成を記録している。一方、当時の武家の棟梁である足利将軍家では、同朋衆^{どうぼうしゅう}（阿弥衆）と呼ばれる人々が近侍していた。その中でも、立阿弥^{りゅうあみ}という人物が主に挿花を担当していたようである。

⁶ 松を代表とする常緑樹。

⁷ 『日本後紀』弘仁3年（812）2月12日条。

將軍家に次ぐ有力武家である斯波家でも花の会（武衛花会⁸）が盛んに行われていたが、ここでは谷川坊（谷川入道）という人物が指導的立場にあった。一方、寺院では頂法寺六角堂の池坊が花の名手として知られていた。あるいは時衆の四条道場では文阿弥という華道家が活躍していた。文阿弥が花瓶に花を挿すと地面から自然に生えているかのようであったと評されている。彼らは互いに無関係であったわけではなく、大沢久守が四条道場を訪れた記録、あるいは文阿弥が斯波家の花会に参加した記録が残っているように、相互の交流もあった。

花文化が具体的な形を整えるようになった室町時代後期には、挿花について記された書、いわゆる花伝書が残されるようになる。書物が記されるということは、ルールであったり型であったり、挿花文化に一定の形式が作られたということの意味している。16世紀になるとこのような花伝書が数多く出現する。室町時代の代表的な花伝書として、『仙伝抄』がある。現存するものは17世紀初頭以降の刊本のみだが、内容的には室町期のものを再編集したと考えられ、「元服の花」や「軍陣の花」など挿花に関する様々な決まりごとが記載されている。池坊では16世紀前半に記された『池坊専応口伝』が有名である。同書は、後世まで数多くの花伝書に影響を与えることになる。四条道場の文阿弥の名を冠した『文阿弥花伝書』と呼ばれる書物も数種類⁹が伝来している。また、京都以外でも、摂津平野郷の華道家であった西坊唯心軒による『唯心軒花伝書』、あるいは大和長谷寺に伝来した『花ふ（宣阿弥花伝書）』なども知られている。

華道文化の展開

華道文化に大きな転機が訪れたのは1600年前後、すなわち、日本史における中世から近世への移行期であった。桃山文化と呼ばれるこの時代の文化的特徴である華麗な建築様式と相まって、挿花もまた大型化し豪華になった。中世における座敷飾りの一環としての挿花は立て花と呼ばれ、基本的に「しん（真、心）」とそれを支える下草という原初的な構成要素しか持たなかったが¹⁰、近世になると七つ程の役枝を持つようになる。このような花は、立華と呼ばれた。

17世紀前半、後水尾天皇（院）の時代には池坊二代専好が活躍した。天皇は立華を非常に好まれ、宮中でも立華会を何度か開催されている。二代専好はこのような場に顧問として招かれた。二代専好の弟子からは、十一屋太右衛門¹¹や大住院以信¹²、富春軒仙溪¹³といった著名な華道家が出ている。また、この頃、大覚寺や曼殊院、妙法院などの門跡寺院においても立華会が盛んに催された¹⁴。

桃山文化の一つの特徴は「豪華絢爛」であるが、他方で「侘び」という一見対極的な価値観・美

⁸ 斯波家が代々兵衛府の役職に就いたため、同家は兵衛府の唐名である「武衛」の名で呼ばれた。

⁹ 嵯峨の鹿王院伝来本、近江坂本の西教寺伝来本など。

¹⁰ 「しん」には依代の思想的影響が見られる。このほかに、「色絵」や「添え枝」といった枝が補助的に用いられることもあった。

¹¹ 池坊の幹部で立華の解説書である『古今立花大全』の著者。

¹² 本能寺の僧。関東に派遣され主に江戸の武家屋敷で花を立てた。

¹³ 桑原専慶流の祖。

¹⁴ このような寺院における立華会は「立華興行」と呼ばれた。

意識も内包していた。挿花に関していうと、「豪華絢爛」に対応する花が立華なら、「侘び」に対応したのが抛入花・茶花であった。後者は定まった型を持たないので定義するのが難しいが、立華と比較して小型でカジュアルな花といえる。「抛げる」とは上方に向かって「立てる」のではなく、横の方に流して挿すことを意味する。中世から、式正の花である立て花とは別に、天井から釣り下げた釣り花器や柱や壁に掛けられた掛け花器に軽く挿された花が抛入(花)と呼ばれたが、後世には置き花器の花もそれに含まれるようになる。また、この花は、中世後期に隆盛した侘び茶の室内装飾にも取り入れられ、茶花としても発展する。

17世紀後半頃から立華が形式化・硬直化してその限界が見えてくると、この抛入花が隆盛した。その立役者の一人は、煎茶道や香道にも通じていた文人の釣雪野叟であった。彼はその著書『抛入岸之波』の中で、立華はあまりに人為的でありそこには花の自然の姿を見ることができないと批判している。この抛入花の流行の背景には、明代の文人である袁宏道の插花書『瓶史』や張謙徳の『瓶花譜』など、中国瓶花の影響があったことも見逃せない。

その後18世紀の中頃になると、源氏流の千葉龍下の活躍もあり、生花という様式が形成される。図式的に言えば、生花は立華と抛入花の中間に位置している。つまり、立華のような決まった型を有しながら、小型で一、二種類の花材しか用いないという点で抛入花に近いものである。これは経済的に余裕のある町人層が饗応に用いる花として生まれた。当時、花の格式の有無は定型の有無と同義であった。したがって、立華のような定型が求められたが、立華は大型すぎて町人の家では実用的でない。一方で、抛入花は自然志向すぎて饗応の花には相応しくない。このような理由で、小型ながらも格式(定型)のある花が求められ、その需要に応えたのが生花様式だったのである。当時、この様式の花は主に「いけばな(插花、活花、生花)」と呼ばれたが、伝統的插花文化の総称としての「いけばな」という語が広まった現在では、それとの区別を明確にするためにこの様式は「せい(しょう)か」と音読されるのが通例である。

この生花様式の隆盛は、流派の林立を促した。この時代に松月堂古流、遠州流、古流など、現在も続く華道流派の多くが生まれている。19世紀になると、中国の古典的世界観である天円地方説に基づいて生花様式を理論的に基礎づけた未生斎一甫によって始められた未生流が大きな力を持った。彼を継いで二代家元となった未生斎広甫はさらに流勢を拡大し、嵯峨御所大覚寺(嵯峨御流)の花務職に就いた。

近現代の華道文化

嘉永5年(1853)のアメリカ艦隊の来航などを契機として江戸時代は終焉を迎え、日本は近代国家として再出発することとなる。その結果として華道を含む多くの伝統文化は断絶の危機を迎えた。

その一方で、この近代社会に対応した挿花も出現した。19世紀末に生まれた小原流はその一つである。小原雲心によって明治末期に大阪で創流された小原流は盛花という新たな様式を掲げたが、近代家屋にも合うこの様式は当時の日本社会において大流行し、多くの流派に取り入れられた。また、昭和2年(1927)には勅使河原蒼風によって草月流が東京で設立された。金属や石などの無機物も積極的に用いた芸術的な作品を特徴とする。1930年代には作庭家の重森三玲をリーダーとし勅使河原らも含むグループによって「新興いけばな宣言」が作成された。彼らは修養的性質を強調する「華道」という考え方を批判し、芸術的な「いけばな」を主張した。一方、池坊を

はじめとする古典的な華道流派も明治中頃以降はその影響力を取り戻し、明治26年(1893)には第一回嵯峨天皇奉獻全国生花大会が開催された。また、真生流の山根翠堂^{さいどう}など、古典的芸道論を近代的概念で整理する華道家も出現した。

戦後は「新興いけばな宣言」を受け継ぐ形で、勅使河原蒼風、小原豊雲、中山文甫^{ぶんぽ}らにリードされた「前衛いけばな」などいわゆる「いけばな芸術」が隆盛した一方で、立華や生花などの古典的様式も伝統文化として存続している。また、中川幸夫^{ゆきお}や川瀬敏郎といった、個人的な作家の活躍も見られる。

3節 現代における華道の現状と社会的な位置付けについて

1節では華道の概要、2節では歴史的変遷について整理した。この節では、華道が現代における私たちの暮らしの中でどのような状況にあるかについて確認する。

3-1 暮らしの中の華道について

3-1-1 花のある暮らし

現代生活においては、庭のある住居に住むことは珍しくなってきた。現代の私たちが暮らしている居住空間の中において、季節感を感じるためには、玄関や居間などに花瓶等の花器に季節の草木や花を挿して季節の風情を取り入れる方法が一般的である。床の間を備えている家の場合、壁面に掛け軸を掛け、床の間の大きさにあわせて季節に応じて草花を挿したりすることもある。このほか、日々の暮らしの中では、仏壇に花を供えたり、お墓参りに切り花を持参して墓前に供えたりすることも慣習の一つとして行われている。生活空間以外に目を向けてみると、料亭や料理屋といった日本料理を提供する店や旅館などでは、玄関先や座敷の床の間に花が挿されている場合が多くある。

このように、私たちの暮らしの中では、伝統的に草花を挿したり、鑑賞したりする機会が様々にある。その一方で、近年ではお祝い事に花束を贈る場合や、教会などで行われる西洋式の結婚式ではブーケが用意され、招待客のテーブルごとにフラワーアレンジメントが飾られる等、いわゆるフラワーアレンジメントやフローラルデザインのようなヨーロッパ方式の装飾で飾り付けられた草花を目にすることが身近になっている。

3-1-2 住空間の変化と華道人口の推移

ヨーロッパ由来の草花の装飾を目にする機会が一般化しているのは、西洋方式の意匠を持つ空間が一般化していることと密接不可分なことと考えられる。住空間の西洋化は進んでおり、日本家屋においても客間や床の間を持つこと自体が減少しつつあるという指摘がある¹⁵。このような住空間の変化によって、伝統的ないけばなを住空間において挿す機会が少なくなり、その一方で西洋由来の草花の飾り方が広まってきたものと推察される。

住空間の西洋化は華道流派の花型にも影響を及ぼしており、住空間の西洋化が進み始めた明治時代以降には盛花が考案されている。現在でも、多くの流派で生活様式に応じた挿し方が各流派によって考案されており、社会環境の変化に対応している状況ではあるが、華道を愛好する者は

¹⁵ 鈴木義弘・梅本舞子「和室の存亡—設置状況と使われ方からみたタタミ部屋の存在基盤と展望」(日本建築学会 日本建築和室の世界遺産的価値特別調査委員会『特別調査委員会報告書 日本建築和室の世界遺産的価値』令和元年)、岡絵理子「日本人の生活と床の間について—考察」(日本建築学会 日本建築和室の世界遺産的価値特別調査委員会『特別調査委員会報告書 日本建築和室の世界遺産的価値』令和元年)

減少している傾向にあることが指摘されている¹⁶。このことは、華道を専業とはせず、趣味として愛好する者の人数の推移から推察することが可能である。

昭和 51 年（1976）から 5 年毎に実施されている総務省「社会生活基本調査」より、華道を趣味とする人の行動者数は、以下のような推移であることを確認することができる。（図 1、図 2）

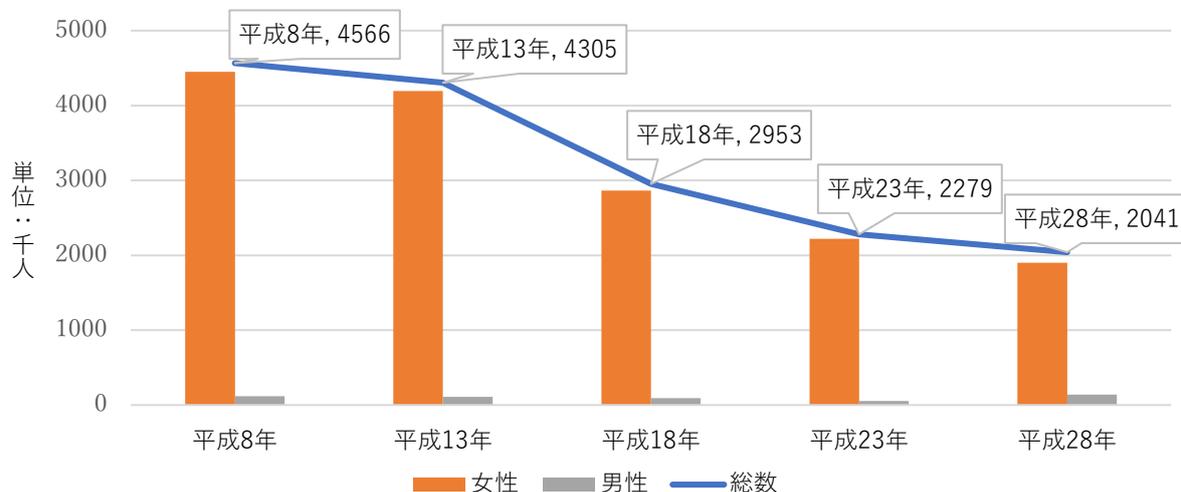


図 1 華道を趣味とする人の行動者数（総数及び男女）の変化

出典：平成 8 年から平成 28 年の「社会生活基本調査」（総務省統計局）

（URL: https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00200533&result_page=1）

を参照し作成した

¹⁶ 今井孝司「いけばなにおける沈滞要因の考察（1）いけばな史における考証」（『京都精華大学紀要』第 17 号、京都精華大学、平成 11 年）

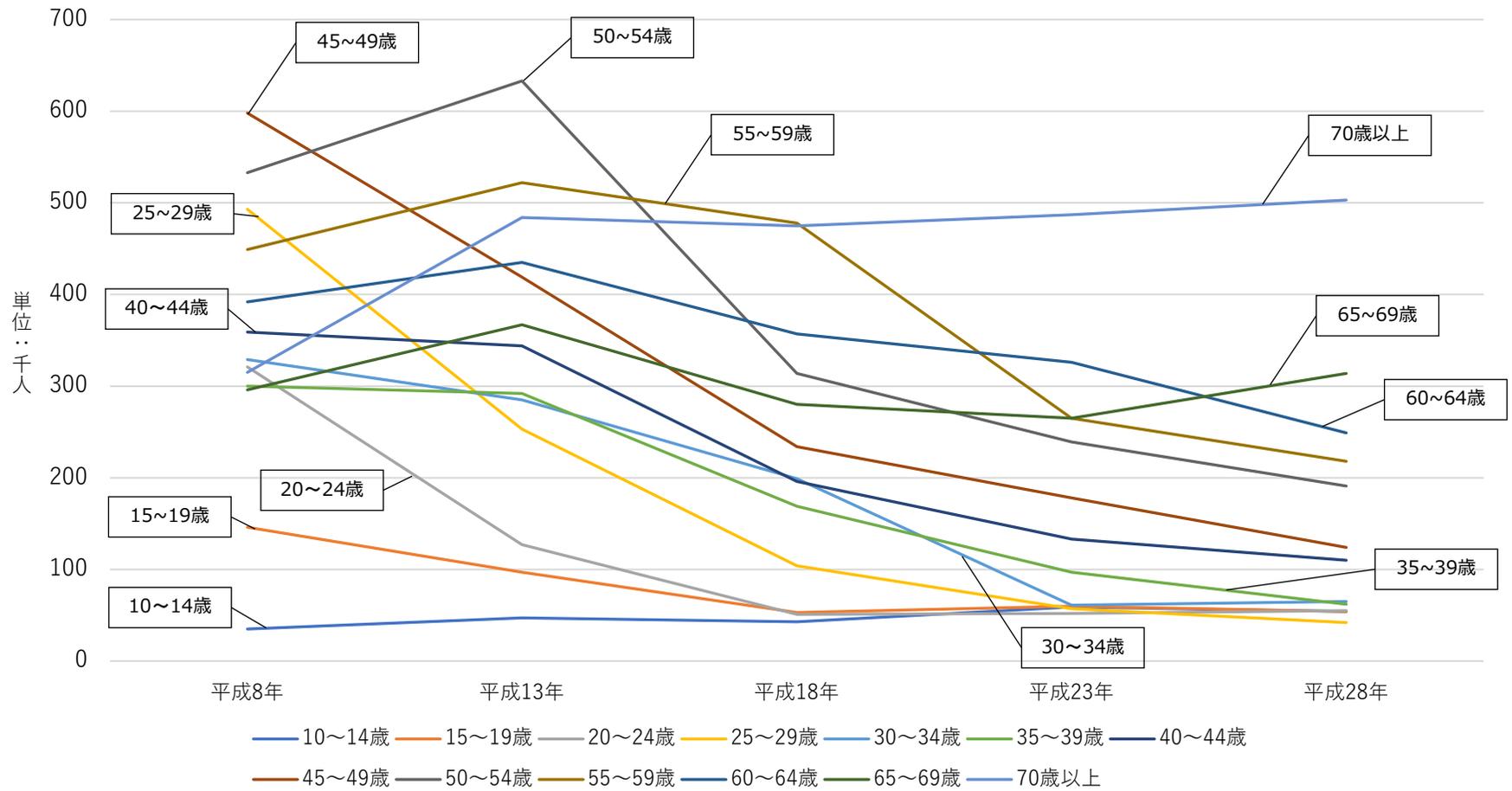


図2 華道を趣味とする人の行動者数（年齢別）の変化

出典：平成8年から平成28年の「社会生活基本調査」（総務省統計局）

（URL: https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00200533&result_page=1）を参照し作成した

まず、男女構成比を見ると、華道を趣味とする者のほとんどが女性であることが分かる。次に行動者数の推移をみると、平成 28 年（2016）の調査時点では約 200 万人が趣味として華道を行っていることが確認できるが、平成 8 年時点の行動者数約 450 万人と比べると全体で約 5 割強減少している。このように、全体として行動者数が大幅に減少している中で、70 歳以上の年齢層は、平成 8 年から平成 28 年にかけて増加している。また、平成 23 年から平成 28 年にかけては、全体の華道の行動者数は微減に止まっており、20~24 歳、30~34 歳、65~69 歳の年齢層は増加の傾向が見られ、特に 65~69 歳の層は大きく増加している。

このように、「社会生活基本調査」からは、華道を愛好する者の総数が減少傾向にあること、また 65 歳以上の高齢者層が人口の多くを占めていることが分かった。この結果は、平成 29 年に文化庁が実施した生活文化等の団体に関する調査において、華道団体から回答されたアンケートに、流派会員の高齢化や会員減少が問題点として挙がっていたこととも一致している。

また、経済産業省大臣官房調査統計グループが実施している「特定サービス産業実態調査」によれば、直近の平成 30 年の結果のうち、「生花・茶道」の教養・技能教授業務の事業所数や事業従事者数が、平成 21 年の結果に比して大幅な減少を見せていることが分かる（表 1、表 2 を参照）。このことから、華道指導者の減少は、教養・技能として教授される機会の減少へとつながっていることが見て取れる。つまり、華道愛好者の人口減少は、華道教授を生業とする華道指導者の生活に大きな影響を与えていると考えられる。

表 1 生花・茶道教室の事業所数の変化

	平成21年	平成22年	平成25年	平成26年	平成27年	平成29年	平成30年
事業所数	6935	6070	5099	4381	4615	3698	3534

※平成 21、22、25、26、27、29、30 年の「特定サービス産業実態調査」（経済産業省大臣官房調査統計グループ）（URL:<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/database?page=1&toukei=00550040&tstat=000001023224>）を参照し作成した

表 2 生花・茶道教室の従業者数の変化

	平成21年	平成22年	平成25年	平成26年	平成27年	平成29年	平成30年
教養・技能教授業務の事業従事者数（人）	8908	8475	6789	5553	6883	7006	5000

※平成 21、22、25、26、27、29、30 年の「特定サービス産業実態調査」（経済産業省大臣官房調査統計グループ）（URL:<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/database?page=1&toukei=00550040&tstat=000001023224>）を参照し作成した

<参考>

- ・「社会生活基本調査」（総務省統計局）
- ・「特定サービス産業実態調査」（経済産業省大臣官房調査統計グループ）

3-2 華道に関する国民意識調査について

3-2-1 調査の概要

3-1では、住空間の変化等により、暮らしに身近な花を飾る習慣等に大きな変化が起こっていること、華道を趣味とする人の数や教授業務の事業従事者数が大きく減っていることを確認したが、そのような現代において、国民が華道に対してどのような意識を持っているかを知り、華道振興のきっかけを探るため、華道の経験の有無、興味を持ったきっかけ、華道に持つイメージや習うにあたってのハードル等について、1,500人を対象に、次のとおりインターネットによる国民意識調査を実施した。(詳細は巻末参考資料を参照。)

■調査設計

調査方法	インターネット調査								
調査地域	全国								
調査対象者	12歳以上の男女（12から14歳は親による代理回答）								
サンプル数	1,500 サンプル								
		12～14歳	15～19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
	男性	50	100	100	100	100	100	100	100
女性	50	100	100	100	100	100	100	100	
調査期間	2020年10月1日（木）～10月5日（月）								
設問文	Q1：過去の華道経験・経験内容 Q2：現在の華道経験・活動内容 Q3：華道をやめている理由 Q4：華道をはじめたきっかけ Q5：華道の魅力・面白さ Q6：華道をすることで得られるもの Q7：華道への興味関心をもったきっかけ Q8：華道をやってみたいと思う理由 Q9：華道意欲がある人のハードル Q10：華道に対する印象 Q11：華道をやめた人が当初持っていた興味関心 Q12：華道が現在まで引き継がれている理由								

3-2-2 調査結果概要

調査結果は以下のとおりである。

Q1 過去の華道経験・経験内容【全調査対象者への設問】

華道の経験の有無については、「これまでに経験したことがない」が74.8%と最も多かった（以降では「華道未経験者」という）。

一方、華道を経験したことがある者（以降では「華道経験者」という）の経験機会としては、「華道・いけばな教室で経験した」が11.5%、「学校の授業で経験した」が5.1%、「学校の部活動で経験した」が4.2%、「家族や親族がしていたので経験した」が4.0%、「文化団体や地域のイベント等で経験した」が2.7%、「カルチャーセンターで経験した」が1.9%、「大学・専門学校のサークルで経験した」が1.0%、「大学・専門学校の講義で経験した」が0.7%、「通信教育で経験した」が0.7%、「その他」が0.6%となっている。華道経験者の経験機会として、華道・いけばな教室が経験の場として多くの割合を占めていることが分かる。次に学校での授業や部活動での経験機会も多いことが分かる。

華道の経験機会の上位3項目ともに、女性の割合が男性の割合を上回っているが、特に「華道・いけばな教室」での経験は女性の経験割合が圧倒的に高くなっている。

Q2 現在の華道経験・活動内容【華道経験者への設問】

華道経験者の現在の華道活動について、全体の86.2%が「現在はしていない」と回答している。

一方、現在華道活動をしていると回答した19.8%のうち、「カルチャーセンターに通っている」が5.6%と最も多く、「華道・いけばな教室に通っている」が5.3%、「文化団体などに所属し活動している」が3.4%と続いている。

華道活動をしている年代としては、30代が最も多く活動している。また、活動機会別にみると「カルチャーセンターに通っている」と回答した年代は20代が最も多く、「華道・いけばな教室に通っている」、「文化団体などに所属し活動している」と回答した年代は30代が最も多いことから、活動を行う場所によって年代に違いが見られる。

Q3 華道をやめている理由【華道経験者で現在華道活動をしていない人への設問】

現在華道活動をやめている理由は、「興味関心が無くなったから」が24.5%で最も多く、次いで「環境が変わり、華道・いけばなを続けられなくなったから」が19.3%、「学校を卒業したため、する機会が無くなったから」が14.4%と続いている。

年代別で見ると、10代後半、20代で「学校を卒業したため、する機会が無くなったから」との回答が多く、次いで「興味関心が無くなったから」との回答が続いている。また、50代と70代以上では「環境が変わり、華道・いけばなを続けられなくなった」という回答が多いことが分かる。

Q4 華道をはじめたきっかけ（動機）【華道経験者（興味関心がなくなった人、あるいは、学校を卒業し現在華道活動をしていない人を除く）への設問】

華道経験者が華道をはじめたきっかけ（動機）として、「家族や親族、友人から勧められて興味関心を持ったから」が35.1%と最も多く、次いで「華道・いけばなの展覧会やイベントを見て興味関心を持ったから」が20.7%、「興味はないが、家族や親族、友人から勧め

られたから」が16.7%と続いている。

年代別にみると、「家族や親族、友人から勧められて興味関心を持ったから」の割合は50代、70代以上で高い。一方、性別で見ると、回答が最も多かった「家族や親族、友人から勧められて」では大きな差は見られないが、「華道・いけばなの展覧会やイベントを見て」と回答した者の場合は、男性の割合が高くなっている。このような差は「資格等取得のため」、「雑誌や漫画、テレビ等で」、「カルチャーセンターで体験して」の回答で見られ、男性の割合が多くなっていることが分かる。

Q5 華道の魅力・面白さ【華道経験者(興味関心がなくなった人、学校を卒業し現在華道活動をしていない、仕方なく学校の授業でやっている人を除く)への設問】

華道経験者が華道のどのようなところに魅力や面白さを感じているかについては、「季節を感じるができること」が48.8%と最も高く、次いで「生きた素材を扱うこと」が45.3%、「美意識が向上すること」39.9%と続いている。

Q6 華道をすることで得られるもの【華道経験者(興味関心がなくなった人、学校を卒業し現在華道活動をしていない、仕方なく学校の授業でやっている人を除く)への設問】

華道経験者が華道を行うことで何が得られたのかについては、「花をきれいに活けられるようになったこと」が50.2%と最も多く、次いで「季節の変化をより意識するようになったこと」が37.9%、「花についての知識を得られること」31.0%と続いている。

Q7 華道への興味関心をもったきっかけ【華道未経験者あるいは華道経験者で学校を卒業し現在華道活動をしていない人で華道に興味関心がある人への設問】

華道に興味関心を持ったきっかけは、「雑誌や漫画、テレビ等で」が44.7%と最も多く、次いで「華道・いけばなの展覧会やイベントを見て」が27.6%と続いている。

年代別で見ると、最も回答が多かった「雑誌や漫画、テレビ等で」では30代が多く、「華道・いけばなの展覧会やイベントを見て」では、70代以上が多いことが見える。性別による割合の違いを見ると、「学校の授業で」が特に女性の回答者が多い。

Q8 華道をやってみたいと思う理由【華道未経験者あるいは華道経験者で学校を卒業し現在華道活動をしていない人で華道に興味関心がある人への設問】

華道をやってみたいと思う理由については、「きれいに花を活けてみたい」が67.3%と最も高く、次いで「伝統的な日本文化への理解を深めたい」が38.2%、「集中力を高めたい、心を落ち着けたい」が36.4%の順となっている。また、「きれいに花を活けてみたい」については、女性の割合が多かった。

Q9 華道意欲がある人のハードル【華道未経験者あるいは華道経験者で学校を卒業し現在華道活動をしていない人で華道に興味関心があり、条件等が整えば華道活動をしたい人への設問】

どのような条件が整えば、華道をやってみようと思うかの設問について、「誰でも気軽に参加できる体験教室・イベントがあれば」が50.0%と最も高く、次いで「経済的に余裕が出来たら」が46.8%、「行きやすい時間帯で通える教室があれば」が43.0%の順となっている。

性別で見た場合、「経済的に余裕が出来たら」や「行きやすい時間帯で通える教室があれば」が特に女性の割合が高くなっている。

Q10 華道に対する印象【華道未経験者で華道に興味関心がない、あるいは華道経験者で学校を卒業し現在華道活動をしていない人で華道に興味関心がない人への設問】

華道に対して興味関心がない人の華道に対する印象について、「礼儀や作法等に厳しそう」が 37.9%、「普段の生活に必要性を感じない」が 37.0%、「技術的に難しそう」が 33.2%、「教室の月謝や道具等にお金がかかりそう」が 30.0%と続いている。

年代別の特徴をみると、最も回答が多かった「礼儀や作法等に厳しそう」では 15-19 歳の回答が多く、「普段の生活に必要性を感じない」との回答では、70 歳以上と 12-14 歳の年齢層の回答が多く、年代によって華道に対する印象にやや差が見られることが分かる。

Q11 華道をやめた人が当初持っていた興味関心【華道経験者で現在華道活動をしておらず、華道に興味関心がなくなった人への設問】

華道のどのようなところに興味関心があったかについては、「伝統的な日本文化への理解を深めることができること」が 33.8%と最も高く、次いで「様々な花の鑑賞を楽しむことができること」が 23.8%、「季節を感じるができること」18.8%の順となっている。

Q12 華道が現在まで引き継がれている理由【全調査対象者への設問】

華道が現在まで引き継がれている理由については、「華道・いけばなが日本の様々な伝統文化に深く関わり続けているから」と「日本独自の芸術性を持っているから」が 42.1%と最も高く、次いで「花を活けることをはじめとして自然を愛する文化が生活に身近なものとなっているから」が 32.0%、「日本の精神性や礼儀作法と結びついているから」が 22.7%の順となっており、これらから、日本の伝統文化との関連性、芸術性、自然観や精神性といったものが継承における重要な役割を果たしていることが認識されていることが分かる。一方で、「誰もが楽しめる趣味として受け入れられているから」は 11.1%にとどまり、実践する趣味としてはあまり認識されていないことが考えられる。

3-2-3 まとめ

今回のインターネットによる国民意識調査によって、華道を経験したことがない人が圧倒的に多いことが分かった。華道を経験したことがある人が華道に興味を持ったきっかけとして、家族や親族、友人などの身近な存在による影響が大きいこと、華道の魅力としては季節を感じられる、生きた素材を扱う、美意識の向上等が高い割合を占めていること等が分かった。また、花をきれいに挿すことができること以外にも、季節の変化に対する意識、花の知識、伝統的な日本文化への興味関心、美意識、礼儀作法などの知識や感性の習得が、華道を通じて得られるものとして大きい割合を占めることが明らかになった。

一方で、華道経験者が華道を離れる要因としては、興味を失った場合のほか、卒業・就職なども含めて環境の変化によるものが大きいことも分かった。

華道を中断している人や未経験者が華道を始めるにあたっては、経済面での余裕がないことや忙しさが大きなハードルではあるものの、気軽に参加できる機会が適切に提供されれば始めるきっかけになる可能性も見えてきた。その場合、行きやすい時間帯、交通に利便な場所、近所にある、といった利便性の確保も重要である。

また、華道に興味のない人の華道に対する印象として、礼儀や作法が厳しそう、技術的に難し

そう等のイメージがある一方で、普段の生活に必要性を感じないとの回答も比較的高い割合であったことから、華道への興味関心を持ってもらうきっかけとしては、これらを念頭に置いた対応が図られることが必要である。

現在まで華道が引き継がれている理由として、日本の様々な伝統文化に深く関わり続けていること、日本独自の芸術性を持っていること、自然を愛する文化が身近なものとなっている等が高い割合で挙げられている。このことから、華道が伝統的な文化であり、華道独自の芸術性や自然観は一定程度理解されていることが分かる一方で、「誰もが楽しめる趣味」として評価する割合が低かったことから、華道が実践する趣味というよりは、いわゆる知識として認識されている結果であるとも考えられる。

今後、華道人口を増加させていくためには、華道に興味関心はあるが現在携わっていない人が条件等として提示する「誰でも気軽に参加できる体験教室・イベント」を実施して、初心者等の体験機会を効果的に提供し、興味関心のある者の参入を容易にすることが有効であると考えられる。その一方で、興味を持っていない人にも認知の機会を設け、興味関心を喚起していくことも重要である。生活に身近であるはずの華道について、「普段の生活に必要性を感じない」等とされないためにも、生活の場面における役割について普及啓発に取り組むこと等も、華道の継承にあたって重要ではないかと考えられる。

3-3 現代における華道の社会的な位置付けについて

3-3-1 華道や華道家に対する国内的評価

国の顕彰制度として、叙勲や褒章の栄典制度が存在する。また、文化庁が実施する文化庁長官表彰や地域文化功労者表彰といった顕彰制度がある。

叙勲は、国家又は公共に対し功労のある者、社会の各分野における優れた行いのある者などに対して勲章が授与される制度である。華道においては、受章者は華道団体の長や理事等を務め、華道の振興や普及に永年にわたり貢献してきた者が受章している。(表3参照)

また、平成元年(1989)から実施されている文化庁長官表彰は、文化活動の振興や文化発信に貢献した者を表彰するもので、表4のように、華道流派の家元や華道団体の理事、華道具の製作者が表彰されている。さらに、地域の文化振興に貢献したことによって表彰される地域文化功労者表彰においても、各地域において活動する華道家たちが多く表彰されている。

このように多くの華道関係者が、華道の振興や普及啓発に貢献し、また、華道家としての業績が我が国あるいは地域の文化向上に寄与したとして評価されているなど、現代社会において、華道は日本の文化芸術分野の一つとして確固たる位置付けを持っている。

表3 叙勲受章者一覧

受章年	氏名	主要経歴	叙勲
平成 3 年 (1991)	宮上 武雄	元 (財)日本いけばな芸術協会理事	勲五等瑞宝章
平成 4 年 (1992)	立原 鉦一	(社)帝国華道院副理事長	勲五等瑞宝章
平成 5 年 (1993)	藤巻 あや子	(社)日本華道連盟副理事長	勲五等瑞宝章
平成 6 年 (1994)	西村 栄一郎	元 (財)日本いけばな芸術協会副理事長	勲五等双光旭日章
平成 7 年 (1995)	山本 信治	元 (財)日本いけばな芸術協会常任理事	勲五等瑞宝章
平成 7 年 (1995)	高崎 始	元 (社)日本華道連盟常任理事	勲五等瑞宝章
平成 7 年 (1995)	寺田 正伍	(財)日本いけばな芸術協会理事	勲五等瑞宝章
平成 8 年 (1996)	筒井 常太	元 (財)日本いけばな芸術協会理事	勲五等瑞宝章
平成 8 年 (1996)	手嶋 千俊	前 (財)日本いけばな芸術協会副理事長	勲五等双光旭日章
平成 8 年 (1996)	白石 満男	(社)帝国華道院九州連合会会長	勲五等双光旭日章
平成 8 年 (1996)	白澤 さかい	埼玉県いけばな連合会理事長	勲五等瑞宝章
平成 8 年 (1996)	角地 和彦	(財)日本いけばな芸術協会副理長	勲五等双光旭日章
平成 9 年 (1997)	朴澤 保光	元(社)宮城県華道連盟理事長	勲五等瑞宝章
平成 9 年 (1997)	長田 好子	(社)日本華道連盟常任理事	勲五等瑞宝章
平成 10 年 (1998)	辻井 弘	(財)日本いけばな芸術協会副理事長	勲五等双光旭日章
平成 11 年 (1999)	矢部 清江	(社)日本華道連盟副理事長	勲五等瑞宝章
平成 11 年 (1999)	笹岡 勲太郎	(財)日本いけばな芸術協会理事	勲五等瑞宝章
平成 12 年 (2000)	関江 徳三郎	(社)帝国華道院理事長	勲五等旭日双光章
平成 13 年 (2001)	成瀬 金代	(財)日本いけばな芸術協会理事	勲五等瑞宝章

平成 13 年 (2001)	田中 倭子	(社)日本華道連盟副理事長	勲五等瑞宝章
平成 14 年 (2002)	吉村 龍麿	(財)日本いけばな芸術協会理事長	勲五等旭日双光章
平成 15 年 (2003)	山本 一利	(社)帝国華道院副理事長	勲五等瑞宝章
平成 18 年 (2006)	池坊 専永	(財)日本いけばな芸術協会副会長	旭日中綬章
平成 20 年 (2008)	千羽 理芳	(財)日本いけばな芸術協会副理事長	旭日双光章
平成 22 年 (2010)	大藤 茂三郎	(社)帝国華道院副理事長	旭日双光章
平成 25 年 (2013)	上野 和巳	(社)帝国華道院副理事長	旭日双光章
平成 25 年 (2013)	肥原 良樹	(公財)日本いけばな芸術協会理事長	旭日双光章
平成 28 年 (2016)	野田 敏正	元(公財)日本いけばな芸術協会副理事長	旭日双光章
平成 29 年 (2017)	内田 幸治	(一社)帝国華道院常任理事	旭日双光章

※氏名及び主要経歴は受章当時の表記に従っている

表 4 文化庁長官表彰一覧

表彰年	氏名	主要経歴
平成 29 年 (2017)	中村 哲夫	専正池坊連合会名誉会長
令和 元年 (2019)	川澄 巖	鉄鍛冶
令和 2 年 (2020)	勅使河原 茜	いけばな草月流四代目家元

※氏名及び主要経歴は受章当時の表記に従っている

3-3-2 華道の国際的な評価と国際発信について

1. 華道の国際的な評価について

外国人が華道についてどのように捉えていたのかという点について、明治時代以降に訪日した外国人によって華道に関して著述されている例がある。

まず、明治 6 年 (1873) に英語教師として訪日したバジル・ホール・チェンバレンの“*Things Japanese*” (邦題『日本事物誌』) に、外国人が捉えた華道の評価がうかがえる。同書は、明治 23 年 (1890) に出版されて以降 6 版を重ねており、日本に関する書籍として広く外国人に読まれていたものと推察される。同書では、日本の華道について、ヨーロッパで作られる「花束」と比較して、「芸術に仕立てた」と評し、いけばなの構成や挿し方についても詳述している。また「ヨーロッパ人に数多くの信者を生み出す事であろう」と前向きな評価をしている。

次に、明治 24 年 (1891) に刊行された、建築家ジョサイア・コンドルの“*The Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement*” (邦題『日本の花といけばな芸術』) がある。建築家として訪日したコンドルは、日本の絵画や舞踊を習うほかに華道 (遠州流) も習っていたこともあり、日本の華道の特徴や日本人の美意識について述べている。コンドルは、日本の「Flower Arrangements (いけばな)」の特徴を「the line(線)」、ヨーロッパの「Floral Decorations」の特徴を「masse (塊)」と捉え、日本の華道が線の組み合わせによって構成されていることに注目している。

さらに、ドイツ人哲学者のオイゲン・ヘリゲルの妻でグスティ・ヘリゲルの“*Zen in der Kunst der Blumenzeremonie. Der Blumenweg*” (邦題『花の道』) がある。大正 13 年 (1924) に夫と共に訪日したヘリゲルは、夫婦で弓道や水墨画を習うとともに本原流の華道家武田朴陽に華道を習

い、免状も取得している。書籍はドイツへの帰国後に執筆されたもので、華道の理論や禅との関連性について著述している。

いずれの書籍も、当時、華道を外国に紹介する大きな役割を果たしたものと考えられ、戦前における訪日外国人の視点からみた、当時の華道の様子や外国人による華道への評価が分かる。

現代においては、華道の精神性や芸術性に感銘を受けたアメリカ人のエレン・ゴードン・アレン夫人によって、海外への紹介と交流を目的とする団体、いけばなインターナショナル（現（一社）いけばなインターナショナル）が昭和31年（1956）東京に発足している。ここに、海外からの受容と、国際発信の一致をみるに至った。いけばなインターナショナルは、現在世界各国に143支部があり、国内外の会員数は約7,000名を数え、流派を超えた会員が所属する国際的な華道組織として活動を続けている。日本国内にも13の支部があり、東京支部は各国大使館の大使夫人などが会員となっており、大使館ではいけばなデモンストレーションも行われている。また、同団体の支部はヨーロッパやアメリカだけではなく、香港や上海、クアラルンプール、シンガポール、台北、バンコクなど、東アジアの都市にも設置され、領事館や在外公館とのいけばなイベントなどを展開している。このような活動から、華道が広く *IKEBANA* として海外の人々にも受け入れられ、愛好されていることが分かる。

2. 華道の国際発信について

華道の国際発信については、華道流派それぞれの海外支部の展開や、華道家の派遣などを通じて行われている場合のほか、国の施策の一環として行われている場合がある。以下、どのような場面、どのような目的で華道の国際発信が行われているかを確認していく。

華道の国際発信の例として、流派における活動では池坊がアメリカ合衆国に華道の普及や振興を目的として華道家派遣を定期的に行っていることが挙げられる。また、海外に支部を持つ池坊や小原流、草月流では各国の支部に所属する華道家が大使館などで行われる日本文化発信に係る事業に参加し、デモンストレーションを実施しており、現地の華道家によって華道の発信が行われている。

国が支援する、あるいは、国主導の国際発信の例としては、外務省において行う国際文化交流を目的とした専門家派遣の取組が挙げられる。外務省の発行する「わが外交の状況」によれば、いけばな指導を目的として昭和37年（1962）10月に小原流講師をベトナムはじめ5カ国に派遣、10月から12月にかけて草月流講師をシンガポールはじめ6カ国に派遣しており、国際文化交流の一環として華道家が派遣されていたことが確認できる。また、昭和39年（1964）には、「世界各国の生花に対する関心の増大」を理由として「華道使節」の派遣が行われていたことが確認できる。

現在も、在外公館が管轄地域における対日理解の促進や親日層の形成を目的として、外交活動の一環として開催する総合的な日本文化の発信事業である「在外公館文化事業」において、現地の華道家の協力の下で在外公館において華道のワークショップなどが行われているほか、外務省所管の独立行政法人国際交流基金では、諸外国の国民の対日理解の促進を目的とした「日本文化紹介のための専門家派遣事業」において、華道家の派遣が行われている。

また、文化庁においては日本文化への理解の深化につながる活動や、外国の文化人とのネット

ワークの形成・強化につながる活動を趣旨として文化人や芸術家などを海外に派遣する文化庁文化交流使事業において華道家を各国に派遣しており、平成 18 年度に川井春香をスウェーデン、スペイン、イタリア、フランスに派遣したのをはじめとして、平成 19 年度に三浦友馨を中国に、平成 22 年度には佐々木康人をベトナム、シンガポール、タイ、マレーシアに派遣している。

このほか、国内での国際会議では迎え花や装飾としていけばな作品が展示されるなど、華道は、外交における対日理解促進等に貢献するものとして、また、日本文化への理解深化や外国人とのネットワーク形成・強化につながる活動として期待されていることが分かる。

3. まとめ

以上のように、明治以降、特に西洋から訪れた外国人によって、華道は関心の対象となり、第二次世界大戦後、エレン・ゴードン・アレン夫人によっていけばなインターナショナルが設立されるなど、華道は西洋の文化との対比においてその芸術性や美意識が好意的に受け入れられ、日本文化への理解を深めるための重要な役割を担ってきたことが分かった。

また、華道の国際発信については、華道流派や団体自身によって積極的に展開されているほか、国際文化交流を目的として外務省や文化庁によって華道家の派遣等が取り組まれてきた。こうした継続的な取組によって、華道は日本の伝統的な文化の一つとして海外に広く認知され、日本文化への理解促進や外国人とのネットワーク形成に貢献している。

<参考>

- ・バジル・ホール・チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌 1』平凡社、昭和 44 年
- ・ジョサイア・コンドル著、工藤恭子訳『美しい日本のいけばな』講談社、平成 11 年
- ・「わが外交の近況」第 6 号、外務省、昭和 37 年
- ・「わが外交の近況」第 8 号、外務省、昭和 39 年

4 節 学校の授業及び部活動などで行われる華道について

我が国で、華道が学校の授業の中に取り入れられたのは明治時代に遡る。明治9年(1876)に京都府女学校の授業に「女礼」が設けられ、この中で華道が行われていた例が最も早い例とされるが、明治15年(1882)3月に文部省から各府県宛てに送った女子中等教育についての通牒に沿う形で、女子教育の一環として伝統文化や礼儀作法を学ぶために授業に華道などの教科が取り入れられていった^{17,18}。

現在では、総合学習の時間に体験機会が設けられる場合や、私立の中学や高等学校などで華道が授業の一環として取り入れられている場合もある。また、文化部活動において華道が行われている場合もある。この節では、現代において学校の授業及び部活動などでどのように華道に触れたり、学んだりしているのかという点について取り上げていく。

1. 小学校、中学校、高等学校、大学の授業における華道の実施例

現在、小学校や中学校では、「総合的な学習の時間」や「特別な教科 道徳」において、高等学校では「総合的な探究の時間」において華道体験を行っている例が見られる。これらは、平成18年に改訂された「教育基本法」において「教育の目標」の一つとして「伝統と文化を尊重」することが掲げられ、また、平成29年改訂の小学校及び中学校の「総合的な学習の時間」と「特別な教科 道徳」の学習指導要領に、「我が国の伝統と文化の尊重」について学習内容に含められたこと等が背景にあると考えられる。様々な地域で伝統文化を尊重する教育の一つとして華道が取り入れられていることについては、国立教育政策研究所による「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」、「伝統文化教育実践研究」等で行われている授業から確認できる。

地方における一例を取り上げると、京都府では「高校生伝統文化事業」として伝統文化を尊重する態度の育成を目的として、府立の高等学校において華道の体験授業が実施されている。また、京都市では、所作・礼儀・道具を大切に扱う心等を学んでもらうことを目的として、「伝統文化体験(茶道・華道)事業」を実施しており、華道については、令和元年度、2年度ともに市立中学校16校で行われ、「社会科」や「美術科」、「総合的な学習の時間」2コマ分を基本とした華道の体験授業とあわせて、「特別な教科 道徳」の授業1コマで「礼儀」「伝統文化」等の授業を行い、総合単元的な学習として実施されている。

このように、小学校や中学校においては、華道体験を通じて、子供たちが伝統文化を知り、尊重する心を学んでもらうこと等を目的として授業内で華道体験が実施されている。

このほか、私立の中学校や高等学校においては、学校が掲げる教育理念に基づいて華道を取り入れている例もあり、必修科目として華道を設けている例や、道徳の授業の中で礼法や華道といった伝統文化に関する授業を設けている例も見受けられる。

¹⁷ 伊藤優花「明治期以降の大衆における華道とジェンダーについて—女子教育の視点から—」

(『早稲田社会科学総合研究. 別冊, 2016年度学生論文集 社会科学部創設50周年記念号』早稲田大学社会科学学会、平成29年)

¹⁸ 橘佳江「女学生と華道・茶道：明治期の京都府を中心に」(『日本教育社会学会大会発表要旨集録』(56)、日本教育社会学会、平成16年)

一方、大学や専門学校においては、大学の教育理念や専門職に役立つ技能として、伝統文化関連の講義において外部講師として華道家を招いて華道の体験学習の機会を設けている例があるほか、華道実習として座学と実技を行う講義を設けている例などもある。また、所定の単位取得をすれば関係する流派の師範の免状が取得できるような機会を設けている短期大学等も見受けられる。

以上、学校種ごとに華道の授業や講義について確認していったが、これらから、華道は日本の伝統文化の代表例として認識されており、教育段階等に応じて学びの程度を深めることによって伝統文化を尊重する態度などをよりよく身に付けることが期待されていることが分かる。

2. 小学校、中学校、高等学校、大学の部活動やサークルにおける華道について

華道は、各学校種における授業や講義以外に、文化部活動やサークル活動においても行われている。

文化部活動の状況について把握した調査としては、平成20年1月～3月に実施された学校における鑑賞教室等に関する実態調査がある。この調査は、全国の学校現場における鑑賞教室や文化部活動の実態を把握することを目的として、全国の全ての小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、計39,804校（有効回収数は20,237校）を対象として実施されたものである。この調査からは、各学校種における部活動の総数や外部指導者の有無などについて把握することができる。

表5 小・中・高等学校の文化部活動における華道部の数について

区分	文化部総数	華道部の数	割合
小学校	19,379	264	1.4%
中学校	15,134	252	1.7%
高等学校（全日制）	23,442	1,041	4.4%

（「学校における鑑賞教室等に関する実態調査報告書」を参照し作成）

表6 小・中・高等学校の華道部での学校外部の指導者・講師の割合について

区分	華道部の数	学校外部の指導者・講師の有無		
		有り	無し	無回答
小学校	264	76.5%	16.3%	7.2%
中学校	252	77.0%	17.9%	5.2%
高等学校（全日制）	1,041	73.0%	18.9%	8.1%

（「学校における鑑賞教室等に関する実態調査報告書」を参照し作成）

表5は、各学校種における華道部の総数と、文化部総数に占める割合を示したものである。この結果から、各学校種の中でも高等学校が最も華道部の数が多く、文化部総数に占める割合も高いことが分かる。

続いて表6は、華道部での学校外部の指導者・講師の割合について示したものである。いずれの学校でも70%以上が指導に際して学校外部の指導者や講師に指導を依頼していることが確認できる。

1週間の活動頻度については、小学校では「週1回未満」との回答が37.9%と最も多く、中学校は「週1～2回程度」が64.3%、高等学校でも「週1～2回程度」が75.5%と最も多かった。具体的な活動内容については上記の調査事業の対象外であるため、その詳細は明らかではないが、華道家等による指導が行われていることが考えられる。

文化部活動の成果発表の場としては、学校内の文化祭や地域の文化イベントでのいけばな展示があるほか、一般社団法人帝国華道院が主催し、流派を問わずに参加が可能な「全日本いけばなコンクール」への参加、池坊が主催する「花の甲子園」、小原流が主催する「学生いけばな競技会」など特定の流派が主催するコンテストへの参加活動がみられる。

また、大学のサークル活動としても華道は行われており、各サークルにおいて花展の開催などを行っているほか、各大学のサークル合同の花展の開催などの例もある。

<参考>

- ・社団法人日本芸能実演家団体協議会編「学校における鑑賞教室等に関する実態調査報告書」平成20年3月
- ・「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業の研究主題－平成18・19年度－」国立教育政策研究所教育課程研究センター（URL:https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidou/list/dentou_118-21.pdf）
- ・「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業の研究主題－平成20・21年度－」国立教育政策研究所教育課程研究センター（URL:https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidou/list/dentou_118-21.pdf）
- ・「教育課程研究センター・生徒指導研究センター関係研究指定校等事業便覧（平成23年度）」国立教育政策研究所教育課程研究センター生徒指導研究センター（URL:https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidou/list/dentou_122-23.pdf）

2章 華道分野の活動について

1 本章の主旨

本章においては、平成27年度、平成29年度に文化庁が行った華道等分野に関連する調査の概要を整理した上で、本年度華道団体及び華道教室に対して実施したアンケート調査の結果を中心に、華道の担い手である華道団体や華道指導者の活動について現状を分析する。

2 平成27年度調査の概要

平成27年度、文化庁では生活文化の保護・保全を促進するべく、現行制度の改正等を含めた適切な文化財保護体系の検討を行うため、華道等団体の実態に関する調査を行うとともに、斯界における評価の状況、地方自治体における生活文化に係る指定状況等の事例調査などを行った。

アンケートやヒアリングの結果、生活文化分野全体に共通して、生活スタイルや価値観の変化による若者の伝統的生活文化離れ、会員の高齢化、指導者及び会員数の減少、教室の財政難といった課題があった。また、華道については、地域貢献や、海外展開への意欲が見られる一方で、多数の流派が存在していることから、日本いけばな芸術協会のような流派横断的な統括組織の機能の一層の充実が期待されるとともに、華道流派の横断的な学術的調査や研究等についての一層の推進の必要性が指摘された。

3 平成29年度調査の概要

平成29年度は、過年度の課題点や検討内容を踏まえた上で、生活文化・国民娯楽（以下「生活文化等」という。）に関して複合的かつ広域的な実態を把握し、生活文化等の振興施策について検討を行うため、生活文化等の国民意識調査を行うとともに、生活文化等の分野・実態について広域的に把握することを目的とした団体アンケート調査などを行った。

調査の結果、男性より女性の方が生活文化のいわゆる「習い事」に興味関心の度合いが高いことが見て取れるなかで、華道は書道、茶道に次いで習い事として経験したことがあると回答した者が多かった。また、今後生活文化等を経験してみたいという意欲を持つ人が経験してこなかった理由としては、「単にきっかけがなかったため」と回答する人が最も多いことから、きっかけづくりの重要性が浮かび上がった。

団体アンケート調査結果からは、会員の高齢化や会員数の減少は華道だけでなく生活文化等を担う団体共通の課題であること、生活文化等の保護・活用のためには、国家レベルでの保護支援や学校教育への導入など、国内における生活文化の認知向上を望む声などが聞かれた。

1 節 華道団体の活動について

1 - 1 華道団体等へのアンケート調査の実施概要

平成27年度及び平成29年度の調査結果を踏まえ、より詳細な生活文化の実態を把握するため、本年度は華道団体（横断的団体・流派・支部）及び華道教室を対象にしたアンケート調査を実施した。華道教室へのアンケート調査の内容等については次節に譲るが、華道団体に対しては、華道の普及啓発、継承等を掲げて活動する団体の具体的な活動内容やその現状と課題、華道のどのような点を大事にしながら継承に取り組んできたのか等を知ることが目的として、以下のような記述式を中心としたアンケート調査を実施した。

なお、本年度調査の主な調査対象は新型コロナウイルス感染症の影響を受ける以前の活動状況（直近3年）を基本としたが、令和元年度末から2年度にかけては同感染症の影響が懸念されたため、その影響の状況についても併せて把握した。

■ 調査設計

調査方法	郵送によるアンケート票の配布、郵送又は電子メール、FAXでの回答
調査趣旨 ・目的	華道を次世代に継承していくためにどのような方策が必要なのか具体化することを目的として、華道についての詳細調査を実施
調査対象	6団体、310流派（配布先リストは巻末参考資料を参照）
調査期間	2020年10月20日（火）～2020年11月6日（金）
回収数	4団体（回収率：75.0%）、102流派（回収率：32.9%）、289支部
設問文	Q1：貴団体・流派（支部）について（概要・主な目的・定款・沿革） Q2：団体・流派（支部）の活動（直近3年）について ①「華道の展覧会」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ②「会員向け研修会、講習会」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ③「一般向け及び学校向けの講演会や講師派遣」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ④「機関誌及び会報誌（WEB版を含む）の発行」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ⑤「一般向けの広報活動」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ⑥「その他活動」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） Q3：華道の継承について (1)「華道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素とその理由 (2) (1)で選択した要素に関して、華道団体としての現状及び守っていく上で必要な取組 (3) 華道を次世代に伝えていく上で、課題と感じていることの有無、及びその理由 Q4：新型コロナウイルス感染症の影響について

1-2 華道団体等へのアンケート調査結果概要

華道団体の活動を、「展覧会」の実施、「会員向け研修会・講習会」の実施、「一般・学校向け講演会や講師派遣」の実施、「機関誌及び会報誌」の発行、「広報活動」の実施、「その他の活動」に分類し、それぞれについて、団体や流派・支部を横断して分析した。概要は以下のとおり。

(1) 華道団体の活動（直近3年）について

① 「華道の展覧会」の実施について

○現状

- ・「華道の展覧会」（花展）は、8割ほどの流派が実施しており、本部展（流展）のほか、支部のある流派は支部ごとや地域ごとに開催している流派もある。会場は、所有するギャラリー、ホテル、デパート、公共施設、神社仏閣など様々である。
- ・各花展の開催頻度は年1回が最も多く、2年に1回、5年に1回などがある。中には年2～3回開催の例や、極端なものとしては、10年に1回開催の流派もある。
- ・花展の作品出展数は、規模や目的によって異なるが、少ないところで15点ほどの出展があり、30～50点ほどが多く、1,600点の出展数を誇るものもみられる。来場者も同様に、規模・期間によって異なるが、少ないところで50人ほどの来場者が、多いところでは、10万人ほどの来場者がみられる。
- ・流派が主催する花展のほか、日本いけばな芸術協会や日本華道連盟、西日本華道連盟などが主催の花展、流派の青年部などの花展、複数の流派が集まって開催する花展もある。また、書道や陶芸と協同した展覧会を実施している流派もみられる。

○今後の課題や展望

- ・今後も継続的な活動や頻度を増やしたいという意見が多くみられるが、出展する社中の高齢化や減少、会場選定の難しさや開催予算がかかることなどの課題や花材・道具が入手しづらいといった問題点も挙げられた。

② 「会員向けの研修会、講習会」の実施について

○現状

- ・「会員向けの研修会・講習会」は、8割弱の流派で実施されており、対象者は生徒向け、一定の資格取得者向け、指導者向け、幹部向けのものなどがある。研修会や研究会、講習会などそれぞれ月1回や年1回開催が多く、定期的に開催している。
- ・参加者は10名規模のものから数千人規模のものまでである。
- ・生徒向けには作品を制作して競うものから作品を互いに講評するもの、実技指導、文書拝読などがあり、技術力の向上や意見交換、交流親睦を目的に開催されており、花展への出品やコンクールでの成績向上などの成果が挙げられている。指導者向けには技術力の向上、育成や花材など華道の研究、伝承事項の確認などの内容がある。研修旅行という形で実施される場合もある。研修会等の講師は、家元が直接教授するもの、流派本部からの派遣、外部講師を招くなど様々である。

○今後の課題や展望

- ・華道の展覧会と同様、今後も継続的な活動や頻度を増やしたいという意見が多くみられ

るが、参加者の減少や講師の高齢化などの課題も抱えている。会員だけでなく、一般への開放の検討を行っている団体もある。

③ 「一般向け及び学校向けの、講演会や講師派遣」の実施について

○現状

- ・「一般向け及び学校向けの、講演会や講師派遣」を実施している流派は3割程度となっている。
- ・学校向けでは保育園から大学まで伝統文化の一つとして総合学習授業や部活動、体験学習、展示・実演などの講師を派遣している。一般向けにはワークショップや公開講座、一般企業・団体や地域向けには講演会、実演などを実施している。中には修学旅行生対象のものなどもある。これら「講演会、講師派遣」は、華道を経験して知ってもらうことや興味関心の向上、華道を通して生命の大切さや人への思いやりを育むこと、また、会員獲得などを目的として、実施されている。

○今後の課題や展望

- ・今後も継続的に実施したいという意見が多くみられるが、「講演会や講師派遣」時のみに終わらず、会員獲得や継続的な参加などにつながるような内容の工夫が課題となっている。また、学校での実施や地域での活動環境づくりなど、継続的な活動に向けた基盤の充実が課題となっている。

④ 「機関誌及び会報誌（WEB版を含む）の発行」の実施について

○現状

- ・「機関誌及び会報誌」を発行している流派は、4割程度となっているが、流派によっては多様な種類の機関誌及び会報誌を発行している。
- ・流派会員向けに流派の活動内容の報告や作品紹介をすることが主な目的となっている。稽古の教本として発行している流派や指導者向けや海外会員向け（英語訳、中国語訳等）、学生向け、一般向けなどを発行している流派もみられる。
- ・「機関誌及び会報誌」は年1回発行している流派が最も多く、年2回、月1回の順に続く。

○今後の課題や展望

- ・発行にあたっての課題としては、発行部数の落ち込みがみられることが挙げられる。また、多くの流派が紙媒体での発行をしているが、郵送に手間や経費がかかるため、WEBへの移行を検討又は実施している流派もみられる。しかし、WEB利用やデジタルに弱い高齢の会員が多く、紙媒体を継続する一方で、これら会員へWEB利用を推進することが課題として挙げられている。

⑤ 「広報活動」の実施について

○現状

- ・流派のホームページ設置や、広報誌を発行している流派が多い。また、家元や会員グループなどのメディア出演やイベント出演などを実施し、プロモーション活動を行っている流派もみられる。

- ・公式 SNS(Twitter・Facebook・Instagram)や YouTube 等で動画配信を行うなど、新たな情報発信手段を用いている流派も多くみられ、これら取組に対する視聴数やニーズが高まっている。

○今後の課題や展望

- ・「広報活動」の実施にあたって、高齢者が多い状況、経費面での負担、技術的なノウハウの不足など、ホームページ等の作成に関する課題が多く挙げられた。ホームページには教室案内の掲載をしている流派もあり、入会への問い合わせはあるものの、会員獲得へ一層のリアルタイムな更新、魅力的なページ作り、SNS や動画の活用が求められている。また、華道界の機運醸成のため華道界全体の広報活動の模索も課題として挙げられている。

⑥ 「その他の活動」の実施について

○現状

- ・「その他の活動」として、以下のような活動が行われている。

【交流・協力等】

- 海外との華道交流、普及活動
- 国賓が来日する際の作品展示、デモンストレーション
- 公共施設のロビーやホール、パーティー会場などでの装花・オブジェの製作
- 地域のお祭りや文化祭等での出展
- 流派教室以外での指導（公民館や介護福祉施設等）
- 舞台やライブへの装花、文化イベントへの協力
- 献華祭（神社仏閣での献華奉納、展示）

【コンクールの実施】

- 高校生がチームを組み、作品の披露とプレゼンテーションを行うコンクール
- 学生を対象にしたインターネット上の花展、コンクール

○今後の課題や展望

- ・一般向けのイベント等における活動においては、注目度もあり、普段、華道に関わりが無い人（外国人も含む）の参加も増え、地域交流（地域活性化）や国際交流にも貢献できるが、イベントに集まった参加者が必ずしも継続的に華道に携わっていくことにはなりづらく、継続性の確保や次への展開につなげることが課題として挙げられている。

(2) 華道の継承について

① 継承すべき要素

今日までの華道の継承において、何が守り伝えられてきたのかを具体的に特定していくために、華道団体向けのアンケート調査において、「華道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素として以下を掲げ、これらの中で、団体において特に大事だと思われる要素を3点選んでもらった。

1. 流派等に代々伝わる花型（花形）や技
2. 花展や生活の場面における実践
3. 和室、床の間などの和の空間
4. 伝統的花材や道具類
5. 華道における自然観、精神性
6. 芸術性や創造性
7. その他

上記はいずれも華道の構成要素として欠くことのできないものであり、分けて考えることが難しい選択肢であるが、華道の何を継承してきたのか、また、次世代に何を伝えていくのかを具体的に知るための試みとして、その大事だと思われる要素に対して、華道団体がどのような取組を行い、何を課題に考えているかを具体的に知るために、あえて細分化して上記のような要素の提示を行った上で、(1)「華道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素とその理由、(2)(1)で選択した要素に対して、華道団体としての現状及び守っていく上で必要な取組、(3)華道を次世代に伝えていく上で、課題と感じていることの有無及びその理由を質問した。

その結果、(1)についての華道団体の選択は以下の表のとおりであった。

「華道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素

要素	団体	流派	支部	合計
1. 流派等に代々伝わる花型（花形）や技	2	86	254	342 (86.6%)
2. 花展や生活の場面における実践	3	63	190	256 (64.8%)
3. 和室、床の間などの和の空間	1	16	35	52 (13.2%)
4. 伝統的花材や道具類	2	16	29	47 (11.9%)
5. 華道における自然観、精神性	0	67	240	307 (77.7%)
6. 芸術性や創造性	1	41	84	126 (31.9%)
7. その他	0	6	18	24 (6.1%)

(N=395 (団体 4、流派 102、支部 289))

上表のとおり、「1. 流派等に代々伝わる花型（花形）や技」、「2. 花展や生活の場面における実践」や「5. 華道における自然観、精神性」に回答が集中したところであるが、それぞれ、選んだ要素に対して【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】【現状】【必要な取組】をまとめると、およそ以下のとおりである。

「1. 流派等に代々伝わる花型（花形）や技」（86.6%）

【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】

流派等に代々伝わる花型や技には流派の特色がある。また、これらは流派の根幹であり、精神である。さらに、型には日本文化の本質が表出されており、普遍的な美の基準とも言う意見もある。

行事のいけばなや、季節の花や枝を扱う技術を継承することは、流派が存続していくうえで不可欠である。季節にあった花や道具などを選び、花材の切り方や水揚げの方法などの工夫を行う。一枝一葉一花全てに意味があり、それぞれの役割がある。草木の特徴や個性を限られた空間・時間で演出し、日本の自然の景色を表現するための規則や規矩（きく）がある。長年、口伝や花伝書によって、各流派で受け継がれており、流派の歴史や理念が表れているのがこの型や技であり、華道を始める者にとっての道しるべとなる一方で、継承する者にとっては流派の誇りや存在意義となっているので、これからも華道を受け継いでいくために欠かせないと認識されている。

【現状】

普段の稽古や研究会を通して伝わっているという意見や、参考書がたくさんあるため、代々伝わる花型は独習でもある程度は習得できるという意見がみられる。

一方で、伝統的な花型等は技術的にも高度であり、短時間での習得は難しく、時間をかけて学ぶ必要のある^{かくはな・かくばな}格花の勉強不足や、格花を指導できる指導者の高齢化や減少が指摘されている。また、指導者の高齢化が進み若い人の入会も少ないことから、伝承が途絶える可能性があるという危機感を持った意見もみられる。さらに、経済面で華道を生業とすることが難しいという現状もうかがえる。

【必要な取組】

研究会や勉強会、公開講座の実施や花展の取組などを通して、華道の魅力を発信し、華道に触れる機会を増やし、花型を知ってもらうことが重要であると考えている流派が多い。また、それぞれ会員を増やす取組とともに、流派を超えた研究や代々伝わってきた資料等の保護を指摘する声もある。

さらに、特に若い人たちに興味を持ってもらえるような工夫として、学校授業・部活動や親子教室など様々な取組を促す意見が多くみられる。

「2. 花展や生活の場面における実践」（64.8%）

【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】

華道を実践する者にとっての花展とは、季節や空間に合わせて、生きている草花の美を立体的に表現することで、習得した流派の型や技を披露し、華道の魅力を広く発信する場である。

また、花展でほかの流派や作品を鑑賞することによって、更なる技術の向上や新たな発見につながる一方、自らの作品を発表することで、稽古に取り組む際の緊張感や目標が生

まれている。

このように、花展は不特定多数の人に華道を知ってもらう手段として欠かせないものである一方で、華道は生活の中で発展してきたものであるため、花を飾る場面や風習を伝えていくことも重要であると認識されている。日常生活の中で花を取り込むことによって心に潤いや安らぎを与え、自然を通じたコミュニケーションという効果も生まれる。

身近にある花のある空間を受け継いでいくためには、型や技術だけではなく、その魅力を発信する花展や日常生活での実践、そのための日々の稽古が必要である。

【現状】

生活の場から床の間がなくなり、花展ではどちらかというと生活から離れた作品が目立ち、節句などでの花飾りの習慣がなくなっている等、生活の場面から花を飾り愛でる習慣がなくなりつつあるという意見が見られる。一方で、通常の稽古の中で、現代の住居や空間に合った花型や季節の花を使用するなど生活の場面で手軽に飾れる花型を教授する工夫をしている流派もみられる。

また、花展などでの展示だけでなく、会員が自宅、職場、ボランティア先（病院、施設）に花を挿し、花と接する機会を創出しているという回答もあった。

【必要な取組】

生活の場面での実践を想定し、身近な花材や新たな花材を用いて関心を高めるなど生活様式の変化に対応した新しい花型の提案や、飾る場所に合う花を挿せるよう稽古で伝えることが必要であるとする意見がみられる。一方、節句など古来の習慣を再認識していくことの必要性を指摘する声もある。

開催を知らせるハガキやポスター配り、SNSなどの活用により、広く一般に広報し、花展に来てもらうことで華道を実感してもらうよう取り組んでいる団体もみられる。

「3. 和室、床の間などの和の空間」(13.2%)

【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】

和の空間は、掛け軸やいけばなで設え、客人をもてなすために欠かせないものであり、花を生かすための日本古来の建築様式の証である。

また、伝統的な花型を説明する際、「本勝手」「逆勝手」などの用語解説を行うが、目の前に床の間がなければ理解し難い。自宅に床の間がなければ、一部の型の再現ができずに、勉強を避ける者もいる。

よって、伝統的な花型を継承していく上でも、日本古来の建築様式や和室、床の間などの和の空間を守っていくことは必要である。

【現状】

現代の生活環境・住空間が昔から伝わる花型と合わなくなって来ているため、現代の空間に合わせた挿し方などを指導している流派もみられる。住環境が変わり、和室、床の間

などの無い家が増えていることで、花の挿し方が変化していることがうかがえる。

【必要な取組】

代々伝わる花型等を守り伝えるために、和の空間を確保し、そこで展示する取組の重要性が指摘されている。一方、壁掛けや小品の作品など今の環境に合うような工夫や花型の開発をしている流派もあり、和室や床の間にこだわることなく、どのような場所でも花を挿して飾ることの大切さを指摘する声もある。

「4. 伝統的花材や道具類」(11.9%)

【大事だ(守り続けていく必要がある)と思われる理由】

伝統的花材や道具類は華道に欠かせないものである。立華や生花等の伝統的な花型の場合、特殊な花材や道具が必要であり、それが手に入らなくなると挿せなくなる。花材などから季節感を感じ情緒を育むのも大切であり、四季折々の花と花器が調和することによって花の美しさが現れる。

伝統的花材や道具類を守ることは、伝統的な花型の継承をしていく上で、また安定した稽古の実施や、華道を理解する上でも必要である。

【現状】

使用する多様な花材が入手困難で、地元の花屋にも流通しておらず、山野で摘むことも困難なものが増えてきているため、稽古に支障をきたすと懸念している意見が多くみられる。

また、道具についても日本伝統の手仕事をする職人が減少し、製造事業者の廃業・縮小などで、品薄状態で、かつ、高価なこともあり、需要と供給のバランスについて課題として挙げている流派もみられる。

【必要な取組】

伝統的花材や道具の魅力再評価するための取組の必要性が挙げられている。また、入手できる先の情報収集など、花材を使用する側において工夫していくことも必要な取組として挙げられている。工夫の一つとして、入手が困難なことを前提として、早めの手配や予約、身近な環境で調達するなどの取組が行われている。

また、道具製作職人や花き生産者について、職人の育成・資金援助、花き農家の支援育成などを求める意見もある。

「5. 華道における自然観、精神性」(77.7%)

【大事だ(守り続けていく必要がある)と思われる理由】

華道における自然観とは、野にある草木を自然から切り離し、その草木が朽ちるまでの時間を感じとることによって、自然の移ろいや命のはかなさを知ることである。

また、生きている草木と人の一生を重ねることで、生命と向き合い慈しむ心が育まれ、その草木を育む自然を大切にしようとする気持ちが生まれる。

このように育まれた感性や心によって、自然で素朴な姿に、技術を超えた品格がいけばなとして表現される。華道は命のあるものを扱う芸術であり、ほかの芸術とは一線を画している。

四季のある環境で暮らす日本人の美意識から生まれた自然観、精神性が華道で表現されるため、守り続けていく必要がある。

【現状】

自然観や精神性の伝承は、日々の稽古を通して教授されている。お正月花、盆花、節句の花等、四季折々の自然を楽しみながら実践している一方で、東京など都心では本当の自然に接する機会が少ないとする意見も見られ、自然観の希薄化が危ぶまれている。また、輸入花きやビニールハウス栽培等の技術により、季節感がなくなっていることを懸念する意見がみられる。

【必要な取組】

精神性の伝承は、日々の稽古で教授されるため、継続的な稽古が必要とされている。自然観については、稽古のほかに野山や水辺に足を運ぶなど自然に親しんだり接したりする機会を設けることが必要との意見もみられる。

また、山野、里山を歩き、自然の花材を自ら調達したり、生花店から自ら花材を選んだりなど、自然を感じ取りながら華道に活かす必要性を指摘する意見もある。

「6. 芸術性や創造性」(31.9%)

【大事だ(守り続けていく必要がある)と思われる理由】

華道は、植物素材による造形芸術であり、規格を重んじる生花と、創造性の発揮が求められる自由花などがある。立華や生花などには、古典としての芸術性があり、一方で、自由花では、型にとらわれることなく、挿す人が自由に個性豊かに表現するなど、芸術性や創造性を追究することを大切にしている。

この芸術性と創造性には華道の新たな可能性が秘められており、時代の変化に応じながら華道を継承する上で大切である。

【現状】

芸術性や創造性は、空間や器の選択、花の組み合わせで磨かれる感性であり、華道独自の芸術性、創造性があるため、体得するのはそう容易でなく、それぞれに感性や技量が異なるため、見て習う、稽古の実践により指導が行われている。

また、花展を通して多くの作品を見ることが、新しい見方を学び、芸術性や創造性を育むための啓発につながっているとの意見もみられる。

【必要な取組】

芸術性、創造性を具現化できるよう何度も稽古を重ね、家元や指導者が挿している姿を実際に見て、実践することが必要とされている。また、花展で多くの作品を鑑賞するほか、美術品や絵画などの芸術に頻繁に触れることで芸術性、創造性を養っていくことが重要としている意見もみられる。

「7. その他」(6.1%)

【大事な(守り続けていく必要がある)と思われる要素とその理由】

- ・ 伝統文化を大切にする姿勢や心を教育すること
様々なことが合理化されて、伝統文化にじっくりと向き合う機会が減っているから
- ・ 華道を通じた子供の感性や自主性の育成
個性を表現することが他分野にも通用する豊かな感性や自主性を育てるため

【現状】

伝統文化は「古臭い」、「身近に感じない」などといった印象を持たれやすく、継承、発展を担う若い入門者がなく、一流派でできることの限界を感じているという声があった。また、華道に触れる機会として学校教育との関わりの少なさを指摘する声もあった。

【必要な取組】

華道界で統一基準を作り、将来的に義務教育化したいとの声がみられるほか、幼い頃から日本文化に対して尊敬できるような環境を整える必要があるとの声があった。

② 華道を次世代に伝えていく上で、団体として課題だと感じていること

「華道を次世代に伝えていく上で、団体として課題だと感じていること」について複数回答で聞いたところ、「2.課題はあるが、課題に取り組むことが難しい状況にある」との回答が243団体と多く、次いで「1.課題はあるが、解決に向けて取り組んでいる」との回答が125団体であった。

華道を次世代に伝えていく上で、団体として課題だと感じていること (複数回答)

要素	団体	流派	支部	合計
1. 課題はあるが、解決に向けて取り組んでいる	2	42	81	125 (31.6%)
2. 課題はあるが、課題に取り組むことが難しい状況にある	2	51	190	243 (61.5%)
3. 課題はない (解決した)	0	3	4	7 (1.8%)

上記を選択した団体が挙げた課題と、解決に向けて取り組んでいる内容等はおよそ以下のとおりである。

「1. 課題はあるが、解決に向けて取り組んでいる」を選択した団体について

【具体的な課題】

華道人口（生徒）の減少と指導者の高齢化が進んでいるため、弟子の育成継続が難しいとする意見がみられる。また、ライフスタイルの変化や趣味の多様化により、若者が華道に興味を示さなくなってきたこともあり、華道の堅苦しく敷居が高い印象を払拭し、華道の魅力を広く伝えていくことが課題となっている。

さらに、伝統的な花材の調達が困難である状況も挙げられている。

【解決に向けた取組】

体験教室の開催や展示作品を見てもらう花展などの取組をしながら、その様子や結果を SNS 等で情報発信している流派もみられ、インターネットや SNS を始めている指導者も増えている。また、学校向けの出前授業、学校外で行われる子供教室や親子教室などを通して、若い世代の人が華道に触れる機会の創出を試みる取組も行われている。

伝統的な花材の不足については、類似の花材で代用する、新たな輸入花を取り入れる等、柔軟に対応する動きもみられる。

「2. 課題はあるが、課題に取り組むことが難しい状況にある」を選択した団体について

【具体的な課題】

教える側である指導者の高齢化や、普及の機会がないこと、入門する人が少ない等の課題が挙げられている。また、華道人口の減少に加え、ライフスタイル、価値観の変化に伴い、華道に関心を寄せてもらうことに限界を感じているといった意見もあり、新規会員を増やすことが難しい状況にある。

さらに、望む花材が手に入りにくいことや花材価格の高騰といった周辺環境の変化が、稽古を継続する難しさとして挙げられている。

【課題に取り組むことが困難な理由】

趣味の多様化により華道への関心が希薄になった理由の一つとして、学校や塾、その他の習い事に忙しく、じっくりと時間をかけて取り組むような習い事に対し、時間的な余裕がないことが挙げられているほか、経済的要因もあり、解決が難しい状況がうかがえる。

また、携帯電話やパソコンなどの普及で、関心事が広がり、新しいものに興味を持ちやすい環境にある一方、伝統文化には接する機会が少なく、生活の場面でも花に触れ、家に花を飾るといった習慣が少なくなっていることも解決が困難なものとして認識されている。

「3. 課題はない（解決した）」を選択した団体について

会議や行事等の運営について、指導者同士で課題をオープンにするなどの工夫により都度課題解決に向けて取り組んでいるとの回答があった。

(3) 新型コロナウイルス感染症の影響について

新型コロナウイルスの感染症の影響については、およそ以下のとおりであった。

【花展や研究会など行事への影響】

- ・多くの流派において、花展や研究会の中止や延期、それに伴う経済的な損失（会場のキャンセル代、会費の減少など）や多大な労力（中止の連絡など）が生じている。行事を実施した場合でも、感染防止対策を余儀なくされるほか、作品数の減少や高齢者の参加者の感染への不安感が強いことが懸念されている。また、各行事が中止や延期になり、やる気が低下したなど心理面での影響も大きい。

【教室への影響】

- ・コロナの影響により、教室が長期間にわたり開講できなくなり、教室を離れてしまう生徒もでてきており、生徒数や稽古数の減少により、中には教室を閉じてしまう指導者も出てきている。
- ・リモート稽古や動画によるオンライン学習なども試行する教室もあるが、生きた花を扱う華道本来の魅力を伝えることや実技指導には限界がある。三密回避と換気や消毒などの対策をしながら、実践での稽古を再開している教室が多い。

1-3 まとめ

今回の華道団体へのアンケート調査の結果、華道団体が生徒の技術向上や交流・親睦、指導者の指導力向上などを目的として花展や研修会・講習会などを開催していること、華道を通して生命の大切さや人への思いやりを学びつつ華道を始めるきっかけとするため、学校や企業等を対象にした講演会や実演などを実施していること、会員向けに活動内容の報告や作品紹介のために機関誌や会報誌を発行していることが分かった。

現在の活動を継続するに当たって、参加者の減少、花材等の確保やWEB利用の推進などに課題があり、特に広報活動を進めるに当たり、高齢者が多い状況においてはホームページ等の作成や更新だけでなく、活用に関する課題も多く挙げられた。ホームページには教室案内の掲載をしている団体もあるが、新たな会員獲得へ向けた魅力的なホームページの作成やSNS・動画等の活用が求められている。また、華道界の機運醸成のために華道界全体の広報活動の模索も課題として挙げられた。

「華道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素についての設問に対しては、「流派等に代々伝わる花型（花形）や技」、「華道における自然観、精神性」、「花展や生活の場面における実践」、「芸術性や創造性」、「和室、床の間などの和の空間」、「伝統的花材や道具類」の順で大事だとする割合が高く、それぞれ重要とする理由はおよそ以下のとおりであった。

- ・花型や技には流派の特色があり、これらは流派の根幹、精神ともいえるものである。継承する花型や技には、花や道具の選び方、花材の扱い方などが含まれる。
- ・華道には日本特有の自然観、精神性があり、自然の移ろいなどを命のある草木で表現し、そこに自然観や精神性が宿る華道は芸術の中でも特殊なものである。
- ・花展は流派の型や技を披露し、不特定多数の人々に華道の魅力を知ってもらう発信の場であり、稽古に取り組む際の目標等ともなっている。また、生活の中で発展してきた華道は、生

活の場面における実践が重要で、かつては節句などでの花飾りの習慣等としての役割が大きかった。

- ・華道には、歴史的に形成されてきた様々な様式があるが、規格を重んじる生花は生花としての、型にとらわれない自由花は自由花としての様式の中での芸術性や創造性を備えている。
- ・流派等に代々伝わる花型や技は、床の間等の和の空間の中で継承されてきた。和の空間が減少していく今、現代における新たな空間での展示を工夫することも重要だが、伝統的な花型や技の継承という意味では、和の空間をはじめ、伝統的花材や道具類が果たしてきた役割等を再認識していくことが必要である。

これらの要素を守り伝えていく必要がある中で、課題としては、生活様式の変化（和の空間の減少等）、指導者の高齢化、会員（特に若年層）の減少、伝統的な花材の調達、華道の堅苦しく敷居が高い印象、触れる機会や興味関心を持つ機会の減少などが挙げられ、これらの課題は、解決に向けた取組が難しいものとして認識されていることが分かった。

以上のように、華道団体の活動においては、少しでも多くの人に華道の魅力を伝えるために、日頃から花に触れる機会の創出を意識し、花展などの開催に加えて、親子で参加できる体験会やイベントの開催、SNSなどを通じた発信、日常生活の場での花の活用の提案など多岐にわたった取組を行っており、流派等における日常的な活動の重要性についてはどの流派等も異論がない一方で、指導者、会員の高齢化や減少等の上記のような課題については、一流派だけで解決することは難しく、流派等を超えて検討していくことが必要なものとなっている。

2節 華道教室の活動について

2-1 華道教室へのアンケート調査の実施概要

華道教室において、華道の担い手を育てるために、どのような指導を行っているか、どのような普及活動等を行っているかをより詳しく捉えるため、選択式と記述式を複合化したアンケート調査を実施した。

■ 調査設計

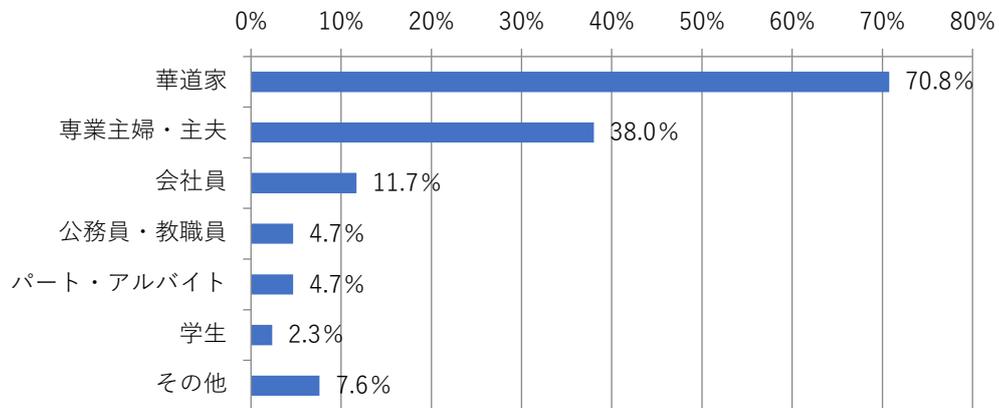
調査方法	郵送によるアンケート票の配布、郵送又は電子メールでの回答
調査対象	795 教室
調査期間	2020 年 10 月 20 日（火）～2020 年 11 月 6 日（金）
回収数	300 教室（回収率：37.7%）
設問文	Q1：教室の概要 Q2：教室の活動状況について ① 指導者の人数 ② 指導者の属性 ③ 教室で指導を受けている人数と属性（年齢別・男女別） Q3：教室での指導について ① 指導内容、フラワーアレンジメント教室併設の有無 ② 指導にあたり利用している教材 ③ 指導の目的 ④ ③の目的達成にあたり行っている指導内容、工夫点 ⑤ ④の指導内容の効果や成果 Q4：教室の運営について ① 生徒の募集方法 ② 教室見学や体験する機会の提供等 Q5：教室外との関わりについて ① 教室の外で行う活動内容 ② 地域コミュニティ以外で、連携している団体や組織 ③ 教室所在地の地域コミュニティとの連携

2-2 華道教室へのアンケート調査結果概要

(1) 教室の活動状況

① 指導者の属性

指導者の属性については、「華道家」が70.8%と最も多く、次いで「専業主婦・主夫」が38.0%、「会社員」が11.7%となっている。

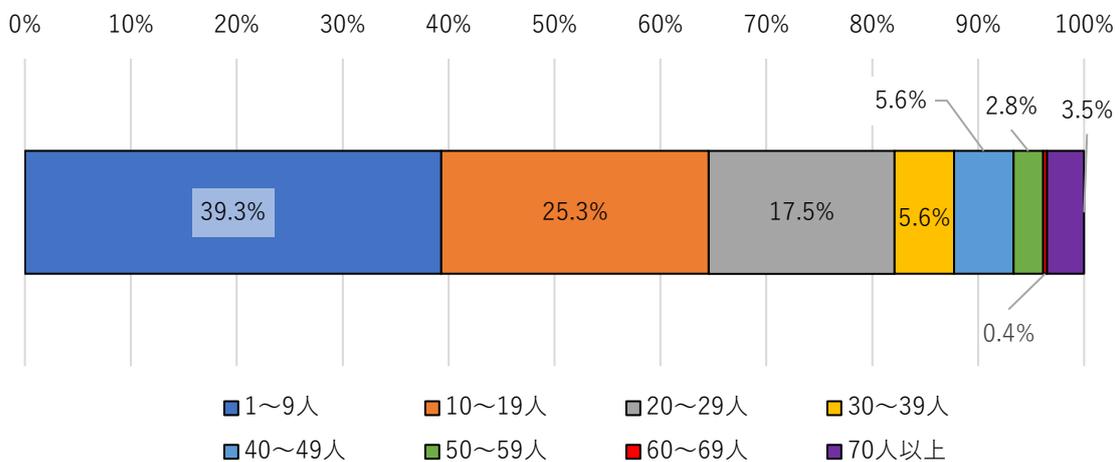


(N=171)

(その他の内容)
自営業、茶道教師等

② 生徒の人数

生徒の人数については、生徒数30人未満の教室が約80%以上を占めている。特に10人未満は39.3%を占める。次いで、10~19人が約25.3%を占めている。



(N=300)

③ 生徒の属性

【年齢構成】

生徒の年齢構成については、「70代以上」が22.2%、次いで、「60代以上」が21.6%となっており、高年齢層の生徒が多くなっている。

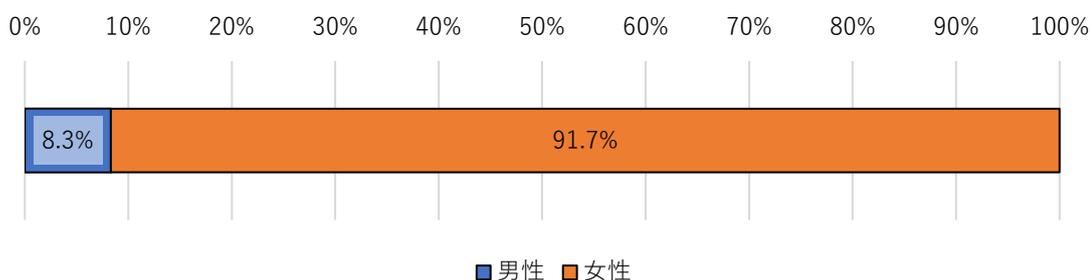
また、「20代」「30代」の生徒数が少ないことが見て取れる。



(N=4,625)

【性別構成】

性別について回答のあった教室の生徒について見てみると、「女性」が91.7%、「男性」が8.3%と女性が圧倒的に多くなっている。

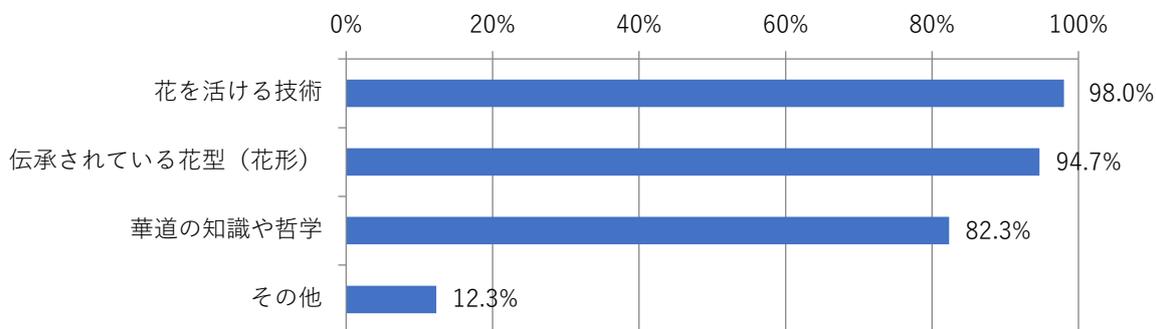


(N=5,426)

(2) 教室での指導について

① 指導内容

指導内容としては、「花を活ける技術」が98.0%と最も多く、次いで「伝承されている花型（花形）」が94.7%、「華道の知識や哲学」が82.3%となっている。

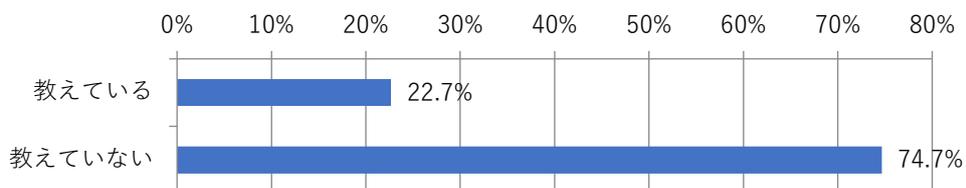


(N=300)

(その他の内容)

花材種類（季節・特性等）、道具の扱い方、礼儀作法、写真撮影、デッサン 等

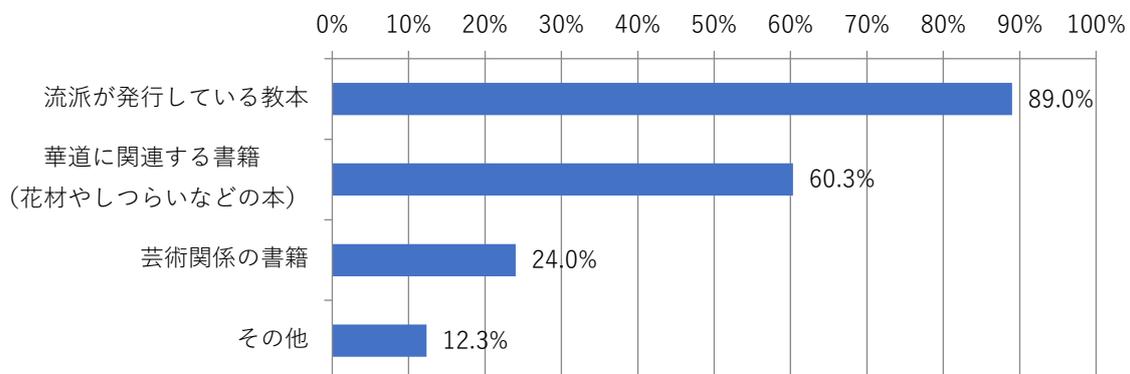
フラワーアレンジメントを教えているかという設問に対しては、フラワーアレンジメントを「教えていない」が74.7%、「教えている」が22.7%となっている。



(N=300)

② 指導教材

「流派が発行している教本」が89.0%と最も多く、次いで「華道に関連する書籍」が60.3%、「芸術関係の書籍」が24.0%となっている。ほとんどの教室で、流派が発行している教本を利用している。



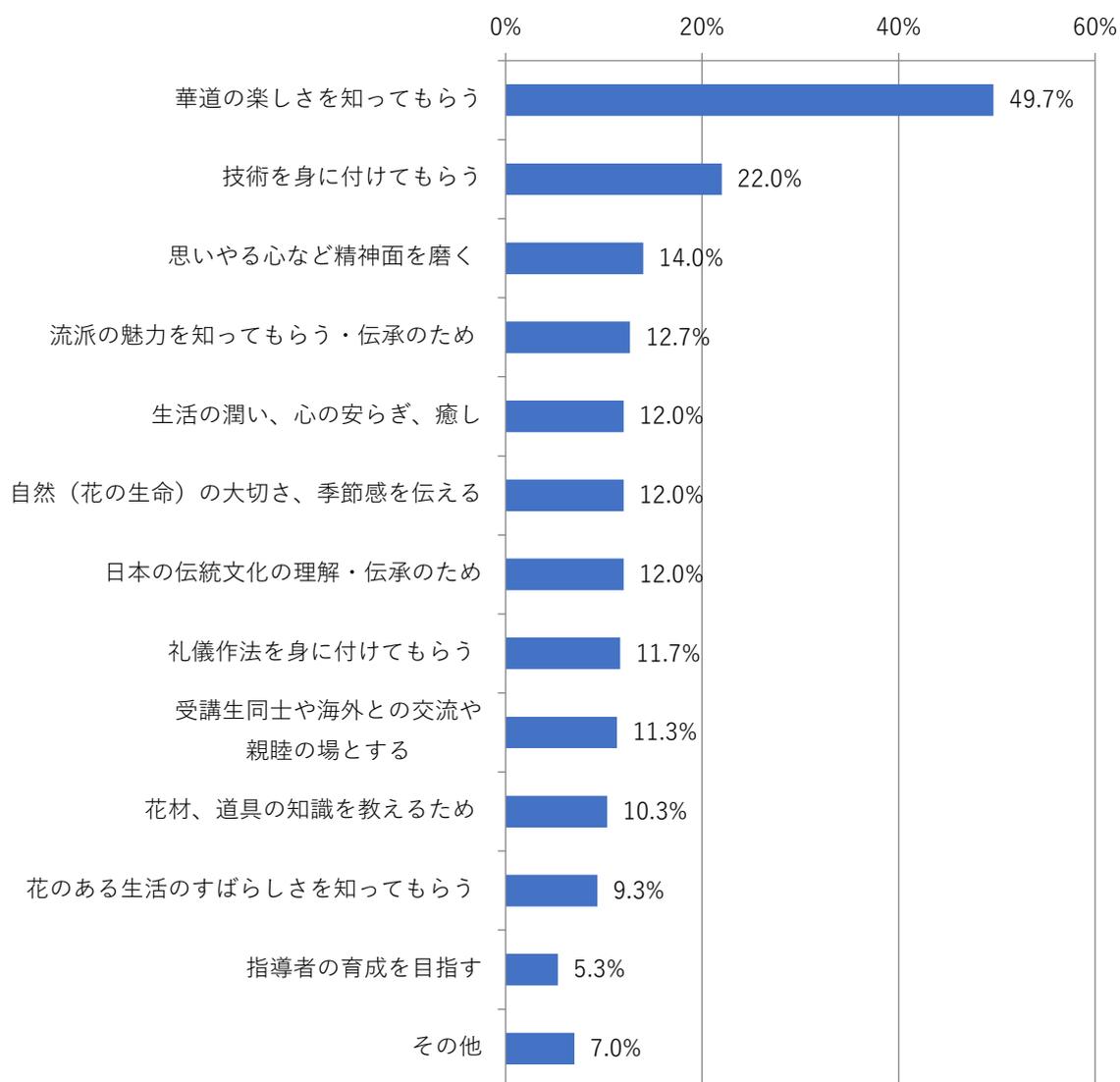
(N=300)

(その他の内容)

独自に作成した教材（絵図）、インターネット情報、植物図鑑、TV番組、源氏物語 等

③ 教室での指導目的

華道教室での指導目的としては、「華道の楽しさを知ってもらう」という趣旨の回答が最も多く、次いで「技術を身に付けてもらう」が回答されている。



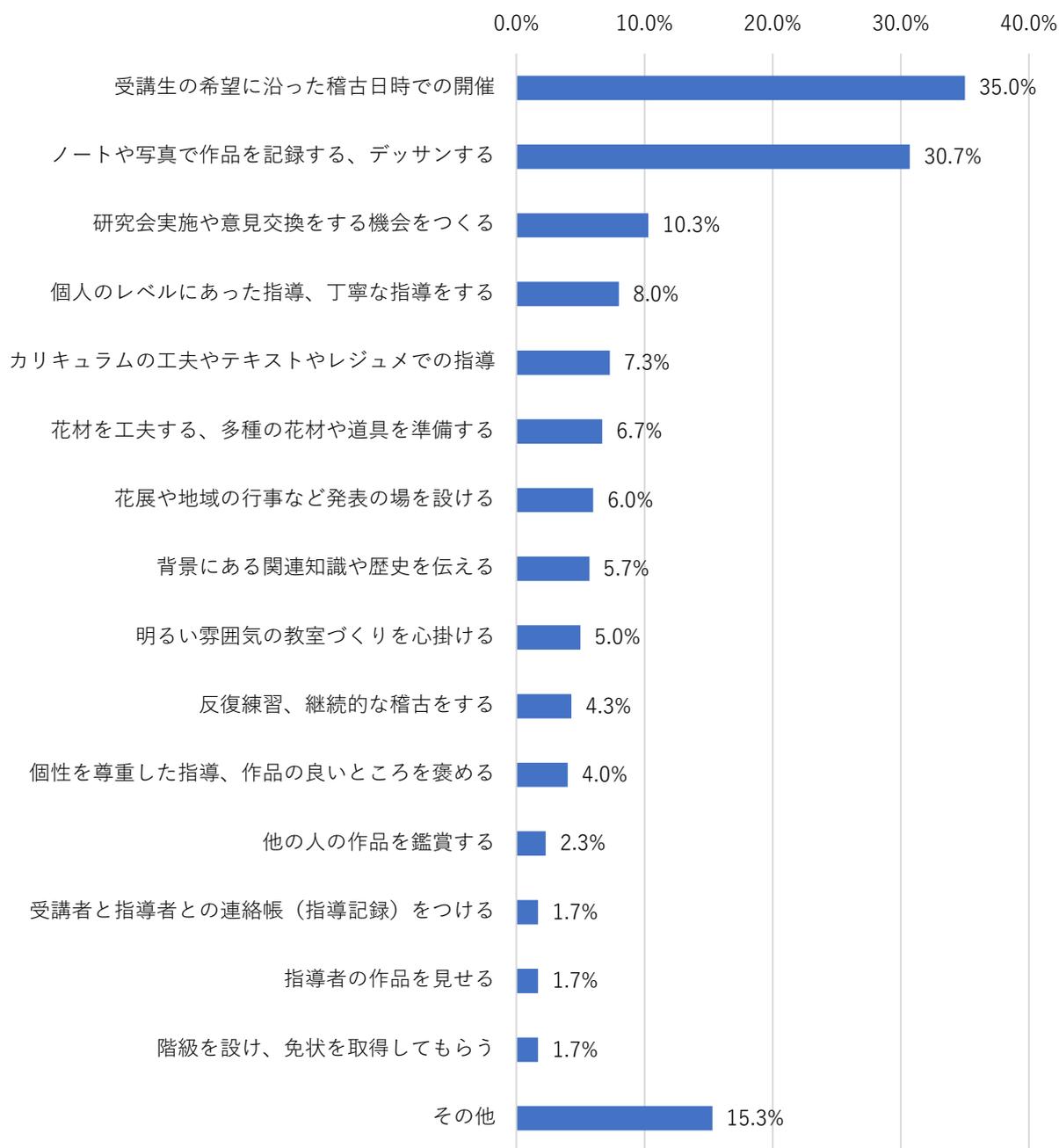
(N=300 ※自由回答を分類)

(その他の内容)

華道を通じて知見を広げる、生きがいとする、個性を引き出す 等

④ 目的を達成するために行っている指導方法や指導内容、工夫点

目的達成のために行っていることとしては、「受講生の希望に沿った稽古日時での開催」が 35.0%と最も多く、次いで「ノートや写真で作品を記録する、デッサンをする」が 30.7%回答されている。



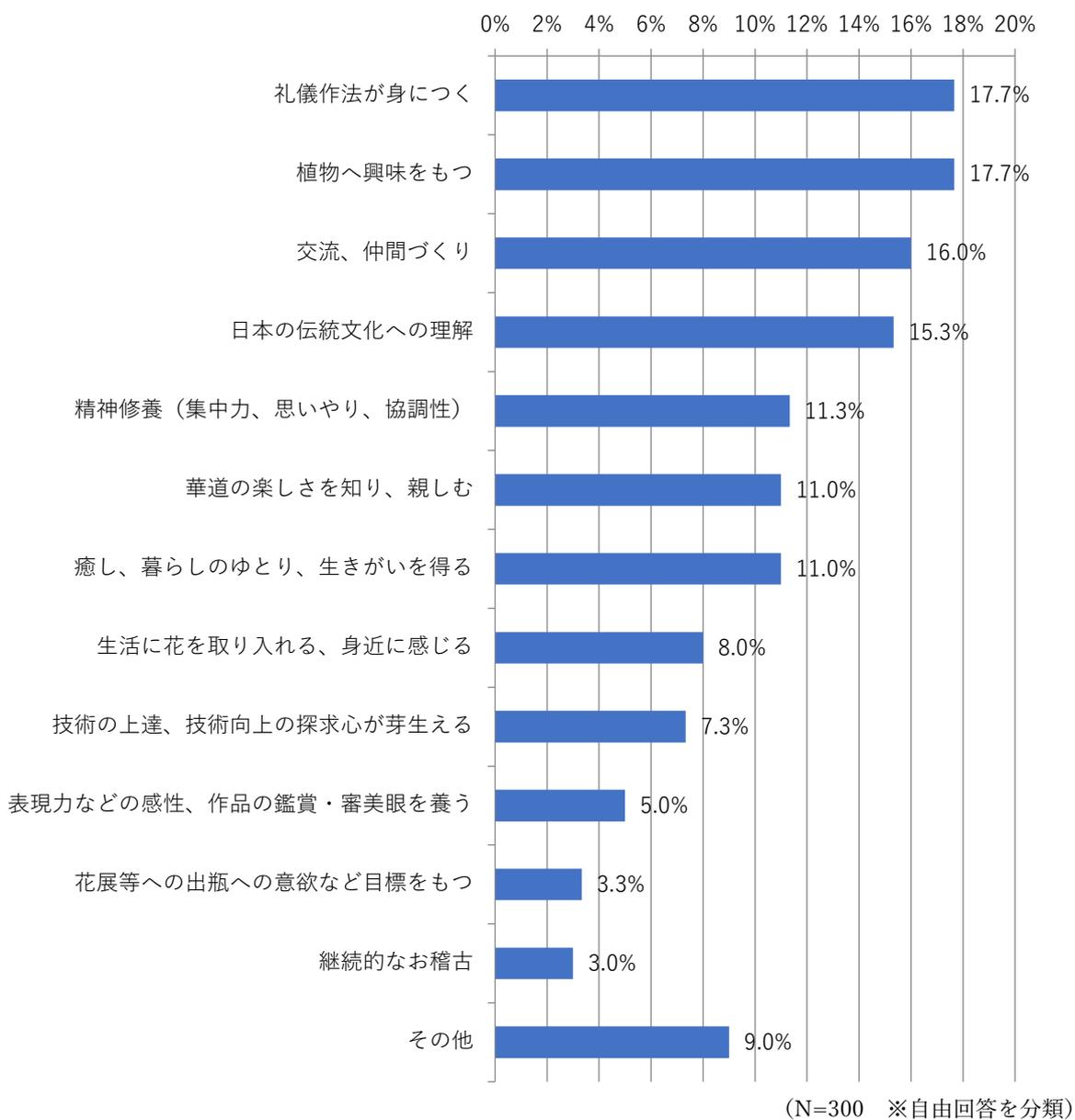
(N=300 ※自由回答を分類)

(その他の内容)

特別稽古をする、合宿をする、指導料を安くする、受講者の作品を SNS 等で共有する、一緒に道具を買いに行く、陶芸教室に行く等花器を自作する 等

⑤ 指導によってもたらされる効果や成果

指導によってもたらされる効果については、「礼儀作法が身につく」、「植物へ興味をもつ（生命の尊さ、花材の美しさ、季節）」との回答が最も多い。次いで、「交流、仲間づくり」、「日本の伝統文化への理解」が多く回答されている。



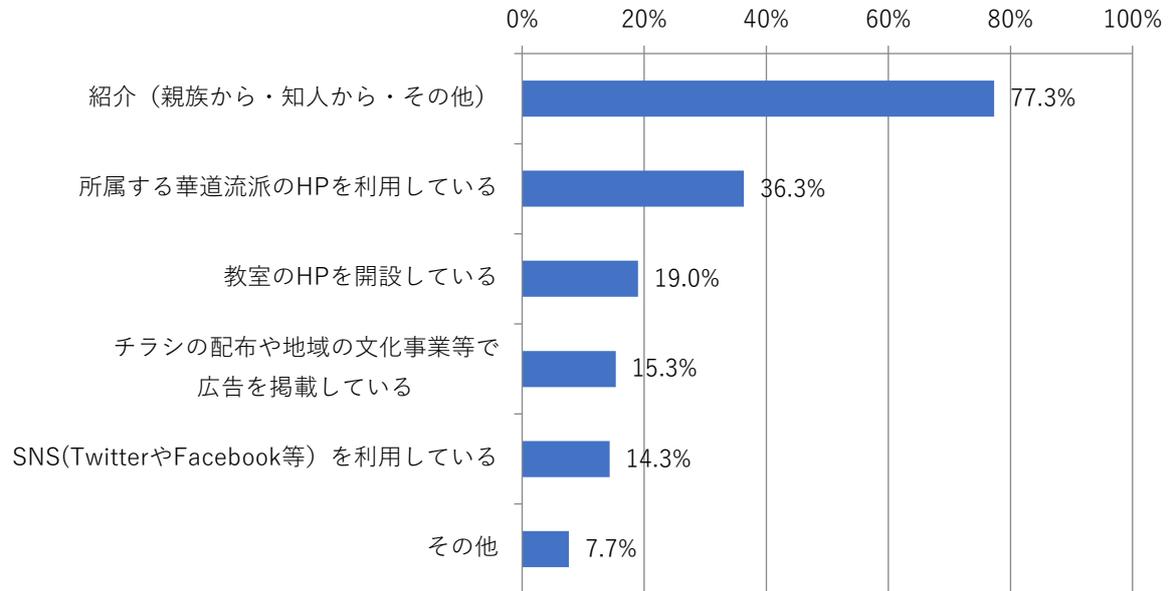
（その他の内容）

自宅で復習できる、正しい道具の使い方を理解する、効果はわからない 等

(3) 教室の運営について

① 生徒の募集方法

生徒の募集方法としては、「紹介（親族から・知人から・その他）」が 77.3%と最も多く、次いで「所属する華道流派のホームページを利用している」が 36.3%、「教室のホームページを開設している」が 19.0%、「チラシの配布や地域の文化事業等で広告を掲載している」が 15.3%、「SNS(Twitter や Facebook 等) を利用している」が 14.3%となっている。



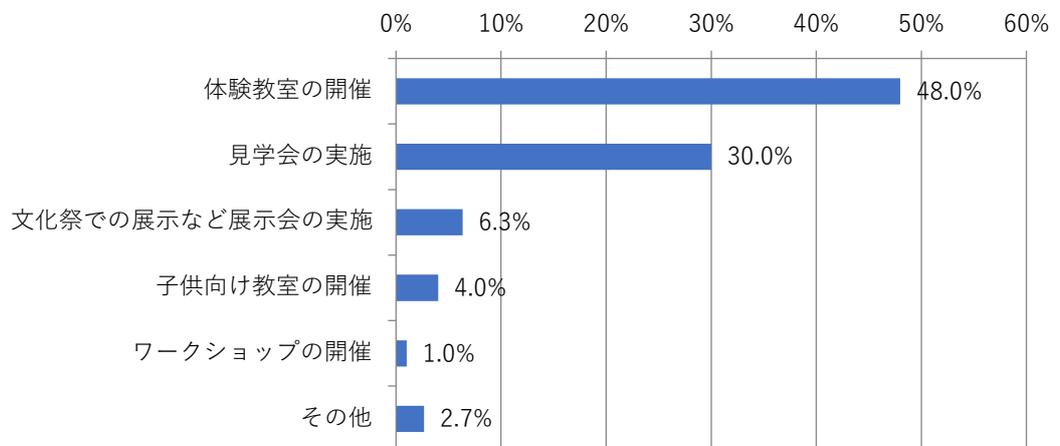
(N=300)

(その他の内容)

掲示板、看板を出す、花展などをきっかけとした参加希望、地域の子供体験教室 等

② 教室見学や華道を体験する機会の提供等、具体的な取組内容

教室見学や華道体験の機会の提供等の具体的な取組内容は、体験教室の開催といった趣旨の回答が、48.0%と最も多く、次いで見学会の実施が 30.0%となっている。

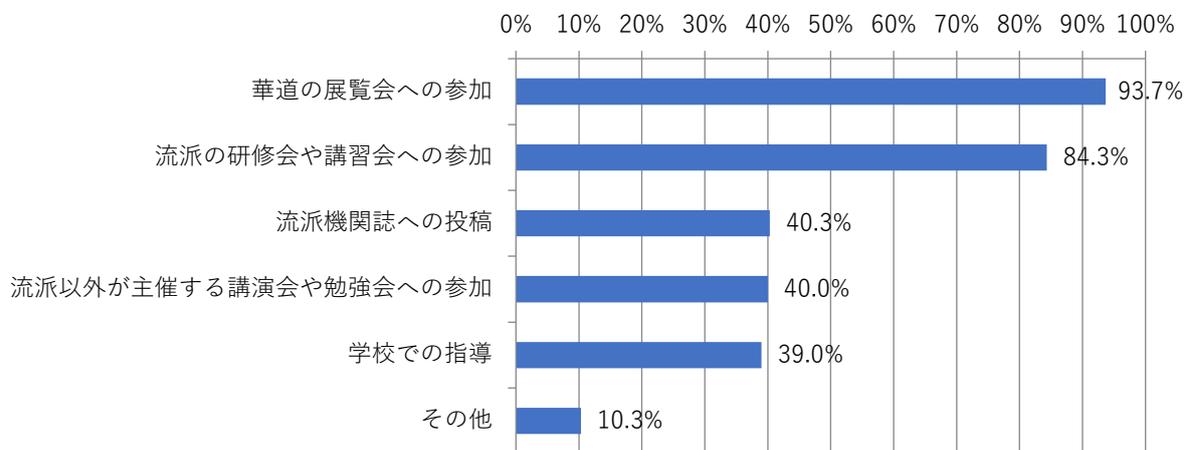


(N=300 ※自由回答を分類)

(4) 教室外との関わりについて

① 教室外での活動

「華道の展覧会への参加」が93.7%と最も多く、次いで「流派の研修会や講習会への参加」が84.3%、「流派機関誌への投稿」が40.3%、「流派以外が主催する講演会や勉強会への参加」が40.0%、「学校での指導」が39.0%となっている。



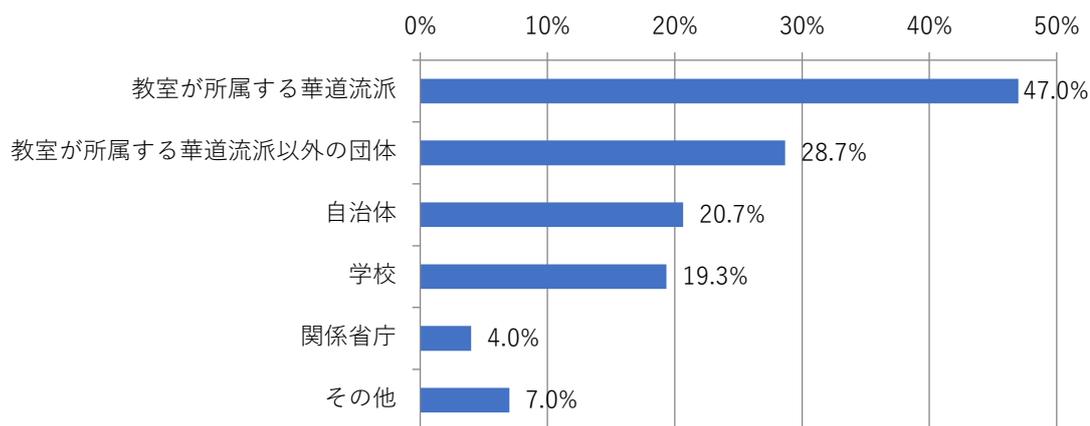
(N=300)

(その他の内容)

公共施設や店舗等への展示、地域のお祭り等行事への参加、華道流派が集う団体への加入、他流派の展示会見学 等

② 外部組織との連携状況

「教室が所属する華道流派」が47.0%と最も多く、次いで「教室が所属する華道流派以外の団体」が28.7%、「自治体」が20.7%、「学校」が19.3%、関係省庁が4.0%となっている。



(N=300)

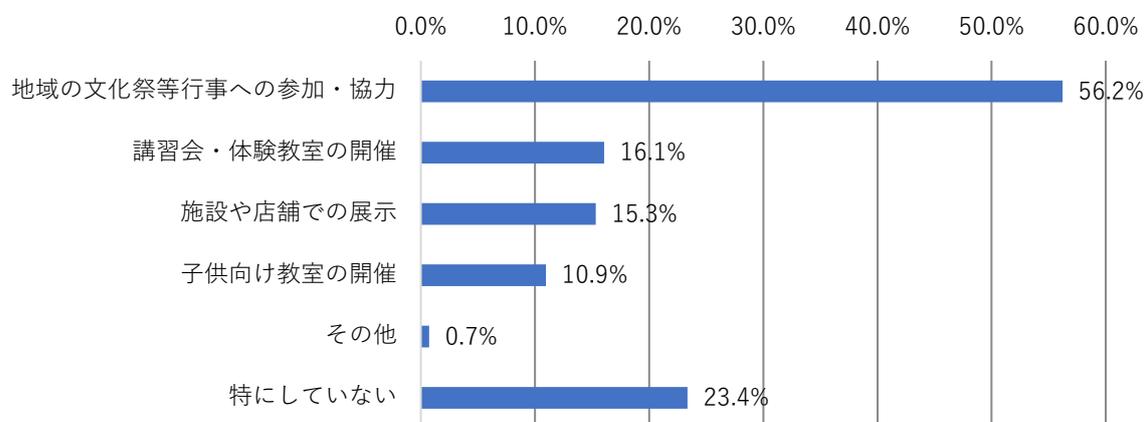
(その他の内容)

神社仏閣、新聞社、福祉施設や老人会 等

③ 地域コミュニティとの連携状況

地域コミュニティとの連携状況として、主に次のような活動が挙げられる。

「地域の文化祭やイベント」といった回答のように、自治体や商店街等が主催する行事への参加が56.2%と最も多く、次いで「講習会・体験教室の開催」「施設や店舗での展示」が多い。



(N=137 ※自由回答を分類)

(その他の内容)

商工会議所の月報に教室案内を掲載 等

(5) 教室の運営上の課題

- ・新規生徒が増えない、華道人口の減少
- ・指導者、生徒の高齢化
- ・華道への興味の希薄（習い事の多様化や生活の忙しさ）
- ・新型コロナウイルスの影響による教室実施不可、参加者数減少など
- ・経済的負担（華道教授のみでは収入が少ない）
- ・子供への教授の機会がない（学校華道を振興したい）
- ・花材の高騰、入手の難しさ
- ・敷居が高いイメージがある、華道界の下火（認知度が低い）
- ・住宅様式の変化により、気軽に活けられる環境・機会の減少

2-3 まとめ

華道教室へのアンケート調査から、ほとんどの華道教室で「花を挿す技術」、「伝承されている花型（花形）」、「華道の知識や哲学」を指導していることが分かる。指導教材は流派が発行している教本が多い。花きを扱う教室であることもあり、華道とフラワーアレンジメントを兼ねている教室が2割強あることが分かった。

華道教室における指導目的としては、「華道の楽しさを知ってもらおう」という趣旨の回答が多く、興味関心を育てながら学ぶよう実践されている。まずは稽古に来て、華道の楽しさを知ってもらうために、「稽古の開催日時や工夫」や、「ノートや写真で作品を記録、デッサンをする」など、指導内容の工夫もされている。また、指導によってもたらされる効果や成果としては、「礼儀作法が身につく」、「植物へ興味をもつ（生命の尊さ、花材の美しさ、季節）」、「交流、仲間づくり」、「日

本の伝統文化への理解」等が比較的高い割合で挙がり、これらの結果は、3-2の国民意識調査において、華道が現在まで引き継がれている理由として挙げられた回答の傾向と大きく齟齬はない。一方、目的を達成するために行っている工夫として、「受講生の希望に沿った稽古日時」を設定する等、受講生に寄り添った教室の開催を行っていることは、担い手の減少が顕著な今日においては非常に重要な工夫であるといえる。

しかしながら、教室運営の課題として、新規生徒が増えないことや、華道人口の減少等が挙げられていたことに対しては、例えば、生徒の募集方法において、親族や知人からの紹介が圧倒的であり、また、体験教室を開催が約5割、見学会の実施が約3割にとどまるなど、外部の人が気軽に参加できる環境が整っている状況とまでは言えないことから、国民意識調査においても示唆されたような、「誰でも気軽に参加できる体験教室・イベント」を実施する等、初心者等の体験機会を効果的に提供する等の工夫も必要となっているように考えられる。

今回の華道教室への調査によって、技術的な面の指導の内容としては花を挿す技術や伝承されている花型の教授が行われているが、教室では、むしろ、技術を身につける以上に、華道の楽しさを知ってもらうことを指導の目的とする回答が圧倒的多数であった。また、稽古日時についても、生徒に寄り添って設定されている。このように、今日の華道教室においては、単に技術的な習得以上に、教室を交流の場とし、華道を楽しみながらも礼儀作法や自然観、季節感、日本の伝統文化への理解につながるような指導が行われていることが分かった。なお、国民意識調査では、華道に興味のない人は「礼儀や作法等に厳しそう」、「技術的に難しそう」というマイナスのイメージを持っていることが明らかになったが、実際の教室での指導においては、それらを払拭するよう工夫が行われていることも分かった。

結 本調査研究事業のまとめ

1 華道で継承されてきたこと

華道は自然を再構成する営みを通して、自然と人間との関係を自覚するという精神的な過程を内包する文化芸術である。日本古来の在来宗教である神道において、神の依代としての草木には聖なるものが宿るとされ、この考え方が華道の自然観や精神性に継承される。また、仏教が日本に伝来するとともに、仏教儀式に供えられる花、すなわち、供華が伝わり、仏の空間に色鮮やかな花々が装飾的に挿されることとなった。さらに、世俗的に観賞される花文化もこれらに合わせ、ここに華道が形成されたと考えられている。

中世以来、花が飾られる空間が変化する過程で、空間に応じ様々な様式が形成された。抛入花や茶花では草木の自然の姿、すなわち、出生を生かして自由に挿すことが求められる。一方、立華や生花といった様式は、草木の自然の姿を重視しつつも人為的なデザインである型を有している。近代以降に隆盛した盛花にも、様々な型があるが、一定の決まりごとはあるが特定の型は見られない自由花というスタイルもある。型のある様式においては、自然の草木の姿形を型に合わせることが必要であり、ここにおいて、枝を成型する等の造形の技術が様々に成った。また、花を長持ちさせるための「水揚げ」などの保存の技術も併せて伝承され、工夫されてきた。

華道が大きな転換期を迎えたのは、明治期とされ、この頃は華道だけでなく多くの伝統文化が断絶の危機を迎えたが、明治末期に近代家屋にも合う様式として盛花が掲げられると、大流行し、多くの流派に取り入れられた。また、「華道」という考え方を批判し、芸術的な「いけばな」を主張する運動が興るなど、時代に応じた新たな動きは絶えず繰り返されながらも、伝統的な華道を継承する取組は家元をはじめとする流派や流派横断的な団体によって支えられ、現在に続いている。

2 伝統的な花材や道具類の継承

曲がった枝などの華道用の伝統的な花材は、市場の一般的な規格と一致せず、また、ニーズはあるものの必要量が少量であるため、通常の流通や生産では採算が取れず、市場に出回らず、生産されないといった現状にある。このことへの対応としては、希望する花材の種類や姿、特徴を小売店に伝え、小売店が直接生産者から買い付けたり、山に自生する枝木を取りに行く専門の業者に注文をしたりする方法がとられるが、花きの業務用需要のうち稽古用消費額も減少傾向にあり、また、消費量や生産量の減少だけでなく、生産者の減少等の影響を受け、年々入手困難となりつつある。このような中で、平成 28 年度、29 年度に「少量花材安定供給体制構築支援事業」（農林水産省）により、「いけばな花材マニュアル」が作成され、華道流派が必要とする花材と供給者が生産している花材をマッチングし、流通事業者も含めた需要者と供給者の相互理解の促進が図られたことは、貴重であった。

華道の道具類については、今回網羅的に調査できていないが、花鋏や花留め（剣山）については、参考資料にあるように花材同様、消費量の減少、製造者の減少、後継者不足などの問題を抱えていたことが分かった。

これらの伝統的な花材や道具類については、華道団体のアンケート結果においても、生花など型のあるものは、特殊な花材や道具が必要であり、それが手に入らなくなると伝統の花型が挿せ

なくなるため守るべきものであるとされ、現状に危機感を持っていた。伝統的花材や道具類を守ることは、伝統的な花型の継承をしていく上で、また安定した稽古の実施や、華道を理解する上でも欠かせないものであるため、これらの供給を支えていく取組が今後ますます必要となっている。

3 アンケート結果から見た今後の団体・教室活動の方向性と課題

国民意識調査の結果から、華道は家族や親族、友人などの紹介によって始める者が多く、季節を感じられること、美意識が向上することなどが華道の魅力として挙げられており、また、技術だけでなく、季節の変化、花の知識、伝統的な日本文化への興味関心、美意識など、知識や感性の習得が華道を通じて得られるものとして大きい割合を占めることが明らかになった。これから華道を始めるとあっては、経済面で余裕がないことや忙しさなどが大きなハードルとなっているが、興味を持つ者にとっては、「誰でも気軽に参加できる体験教室・イベント」や「行きやすい時間帯で通える教室」などがあれば始めたいとする割合が高かったことから、一般向けの体験機会の提供や利便性の確保等が優先検討事項であることが分かった。さらに、普段の生活に必要性を感じていない者が多いことも明らかになったことから、これらへのアプローチについても検討していく必要があることも分かった。

華道団体へのアンケート調査結果から、会員の技術の向上等に向けて、花展の開催、研修会や講習会の開催、機関誌や会報誌の発行等に取り組んでいること、一般向けにも、華道の魅力を伝えるために、親子で参加できる体験会や地域イベントへ出展、ホームページやSNSなどを通じた広報活動等を行っていることが分かった。また、華道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある「流派等に代々伝わる花型（花形）や技」、「華道における自然観、精神性」、「花展や生活の場面における実践」、「芸術性や創造性」、「和室、床の間などの和の空間」、「伝統的花材や道具類」などについても、維持継承に向けて着実に取組を行っていることが分かった。一方で、指導者の高齢化、会員（特に若年層）の減少に加え、近年では、生活環境の変化による和の空間の減少に伴って、伝統的な花型の伝承に困難が伴うこと、伝統的な花材や道具の調達なども年々困難になりつつあり、一流派等では解決が困難な課題が山積している現状にあることが分かった。

華道教室へのアンケート調査結果から、教室では、伝承されている花型や、それを挿す技術、知識等を指導しながらも、指導に当たっては、「楽しさを知ってもらおう」ことを第一に考え、また、生徒が稽古に来やすい日時で開催するなどの工夫があることが分かった。技術指導一辺倒ではなく、交流の場となり、親しみをもって華道に携われるよう、教室運営が行われていることが分かった。一方で、教室運営の課題として、新規生徒が増えないことなどが挙げられていることに対しては、紹介中心の生徒募集の在り方や、入門に心理的ハードルを感じやすい伝統的な習い事であることを踏まえた発信内容についての見直しを図るなど、体験教室やイベント等の開催を活用しながら取り組んで行く等の工夫の余地があることが分かった。

4 華道を次世代に継承するために

華道流派では家元を頂点とした家元制度を組織し、家元と家元の活動を支える華道指導者らによって、各流派の組織的な活動が維持されている。華道の世界には、様々な花型（花形）があり、中世以来、花が飾られる空間が変化する過程で、空間に応じた型が形作られ、型の成立と多様化に伴い、花を扱う技術が蓄積され、また、その型が用いられる場面やその場面における決まり事などの慣習も蓄積されてきた。これらは、流派ごとに継承されており、日頃の稽古だけでなく、流派等における研修会や講習会等において技術等が受け継がれ、また、花展等での発表に向けて、洗練されていく。

華道では、流派の花型や技を習得するための稽古を通じて、礼儀作法や精神性を学び、自然観や美意識を草木で表現する。時には花展を通じて作品として表現されることもあれば、自宅などでは、迎え花や節句の花としてさりげなく表現される。流派等をはじめとする華道団体の活動においては、花展の開催に力を入れているが、自宅等で飾ることについては、生活様式や生活習慣の変化等もあいまって、多くの機会が失われつつあり、国民意識調査においても、普段の生活に必要性を感じない等の意見が高い割合である等、花のある生活が疎遠になりつつある。その一方で、同調査では、生命のある素材を扱うことが、華道の魅力としては高く評価されているため、華道を趣味とする者を増やしていくためには、これらの魅力を最大限活かしながら、礼儀作法に厳しそう、技術的に難しそうといったマイナスイメージを払拭するような取組が必要となる。

実際、華道の魅力は海外の人々にも古くから受け入れられており、精神性や芸術性を持つ日本を代表する文化の一つとして、国際交流の有効な手段となっているように、伝統的な日本文化として長い歴史を持つ華道を国内外に振興していくことは大変重要である。

近年、華道人口の減少や指導者の高齢化、会員の高齢化等が課題となっている。また、新型コロナウイルス感染症の拡大により、対面での稽古の実施、花展の開催等が中止・延期を余儀なくされるなどの深刻な影響を受けている。華道人口の獲得といった面からは、流派を含む華道団体や教室において、様々な検討が行われる必要があるが、日本を代表する文化である華道については、これまで華道が果たしてきた役割等を踏まえ、適切に評価し、支援していくことが必要である。

明治時代においては、華道等の生活文化は、伝統文化や礼儀作法を学ぶために、教育の一環として授業の中で取り入れられてきた。現在は、教育基本法において教育の目標の一つとして「伝統と文化を尊重」することが掲げられ、華道等の生活文化が体験授業等の形で取り入れられた。また、課外においても外部講師を招くなどして活動が行われている。文化庁においても、伝統文化親子教室事業などにおいて、次世代を担う子供たちが伝統文化・生活文化等を計画的・継続的に体験・修得できる機会を提供することにより、これらの確実な継承・発展と、子供たちの豊かな人間性を涵養することを目的に事業を実施しているところである。このように、華道等の生活文化を学校教育等において体験・修得させることは「伝統と文化を尊重」という教育の観点だけでなく、次世代への継承という観点からも非常に有効であり、これらの機会の充実を望む声が多いところである。

華道振興の観点からは、これまで同様に華道の振興や普及に功績のあった者等への顕彰をはじめとして、日本いけばな芸術協会がこれまで華道流派を超えて横断的に取り組んできた活動実績を尊重しつつ、華道界全体の活性化につながるような支援の在り方を検討するとともに、無形文

化財としての保護の観点からは、登録無形文化財制度の活用等も早急に検討していく必要がある。国や地方公共団体による保護措置を講ずるに当たっては、民間活動における自主的な取組を尊重しつつ、華道の普及・啓発等の支援については、流派にこだわることなく行うことが考えられる。

華道を次世代に継承するために、家元を中心とする組織や教室における自主的な活動を促しながら、コロナ禍における臨時的措置も含め、国や地方公共団体においても、適時適切な支援を図っていくことが重要である。

参考資料 文化創造アナリスト(華道)及び有識者会議検討経過

1 文化創造アナリスト

本調査研究事業は、華道に関する豊富な識見を有する者を「文化庁文化創造アナリスト(華道)」として委嘱し、調査研究及び報告書に対して助言等をいただいた。

【名簿】※ 50音順、敬称略、令和3年1月27日現在

井上 治 京都芸術大学 准教授

今井 孝司 神戸松蔭女子学院大学 非常勤講師

重田 みち 京都芸術大学 非常勤講師

2 有識者会議(文化創造アナリスト会議)経過

(1)第1回有識者会議

●開催日

2020年10月8日

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(華道)」概要について
- ・「生活文化調査研究事業(華道)」アンケート内容について
- ・今後のスケジュールについて

(2)第2回有識者会議

●開催日

2020年12月25日

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(華道)」報告書(案)について

(3)第3回有識者会議

●開催日

2021年1月27日

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(華道)」報告書(案)について

3 受託事業者

本調査研究事業はランドブレイン株式会社が受託事業者として以下の業務を行った。

- ・華道の歴史及び華道の花材・道具に関する文献等の調査
- ・華道団体及び華道教室アンケートの発送等作業、花材・華道具関係業者のヒアリング補助
- ・有識者会議等の調整、運営などの業務
- ・報告書(案)の作成

参考資料 花材や道具について

華道を構成する主な材料、道具としては、花材、花器、花鋏、花留め等がある。ここでは、これらのうち、花材、花鋏、花留め（剣山）について、概要や生産状況等について取り上げる。

1. 花材

(1) 花材の種類と特徴等

華道に使用される花材は、一般的なキク、スイセンなどの草花のほか、カキツバタ、コウホネなど水生植物、松や梅などの枝もの、藤などの蔓もの、センリョウ、ナナカマドなどの実もの、シダやハランなどの葉ものなどがある。中には一般の市場に出回らないような、枯れたものや根を使用して、いけばなを挿すこともある。花材は一つとして同じ枝振りはなく、その枝振り（花材の特徴・持ち味）を活かしたいけばなを挿すことも華道の醍醐味の一つである。

(2) 現況

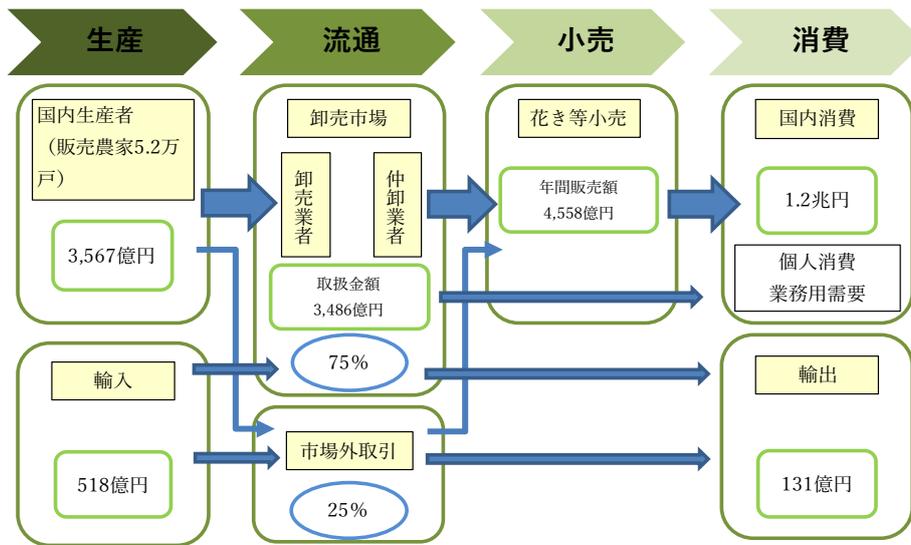
ア) 花きの流通

一般的な花きの流通は、全国の産地から卸売市場に花きが集められ、価格形成後、仕入れた花きを小売店が実需者・消費者に販売する方法が中心である。切り花の場合、一般的に生産者は収穫した花きを100本程の単位で段ボールに入れて出荷する。

一方で花材は、花き業者へのヒアリングによると、例えば枝の真っすぐなものなど一般的に流通している規格品ではなく、曲がった枝など規格外の花きも需要がある。そのため、華道指導者から希望する花材の姿・特徴を小売店が聞き取り、生産者から直接買い付けたり、山に自生する枝木を取りに行く専門業者に注文をしたりするといった市場外取引も多くみられる。

近年、ユーカリやアカシア等流行のものなど特定の花き品目の需要は高まっているが、花材として使用される水生の花き（カキツバタ、コウホネ、ハス、スイレン、ショウブなど）や山取りの品目（コブシ、ナツハゼ、ナナカマド、マツなど）の入手・販売は、年々困難になっている。

<花きの生産・流通・販売の主な流れ>



出典：農林水産省「花きの現状について 令和2年11月」

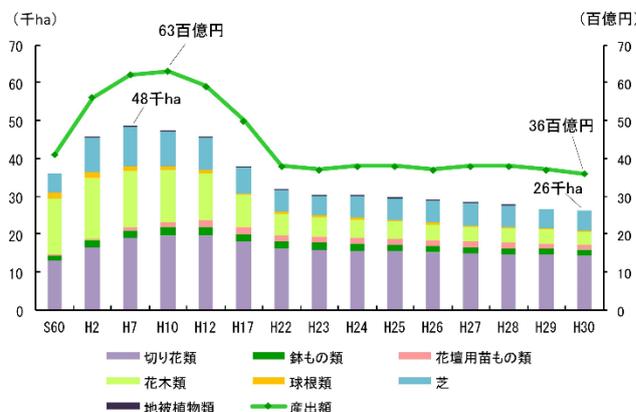
(URL:<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-77.pdf>) を参照し受託事業者が作成した。
 ※上記データは、「平成30年家計調査年報」(総務省統計局)「平成28年社会生活基本調査」(総務省統計局)、「平成30年特定サービス産業実態調査」(経済産業省大臣官房調査統計グループ)、「農林業センサス(平成27年実績)」(農林水産省統計部)、「貿易統計(平成30年実績)」(税関ホームページ)等を基に算出が行われている。

イ) 花きの生産

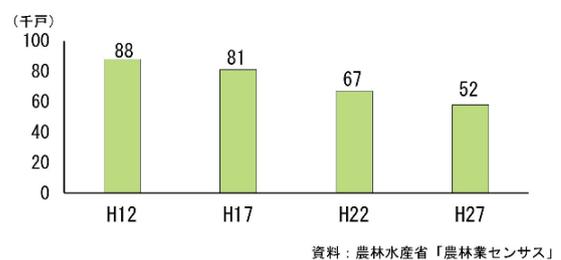
花きの輸入増加や栽培農家の減少等を背景に、花きの作付面積は平成7年、産出額は平成10年をピークにいずれも4割以上減少している。

また、高齢化、後継者不足などにより、花きの生産者数は減少している。見た目が重視される繊細な花きは、ほかの農作物に比べ、高い生産技術や売れる品目を見定める経営能力が必要であること、機械化できる作業が少ないこと、初期投資額の大きさや経営費に占める燃料費の割合が大きく、燃油価格の高騰の影響を受けやすい。

<花きの産出額・作付面積の推移>



<花き生産者数(販売農家)の推移>



出典：農林水産省「花きの現状について 令和2年11月」

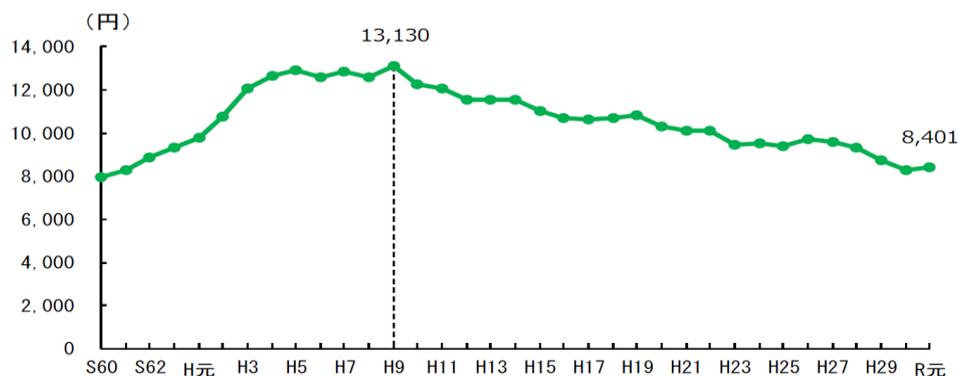
(URL:<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-77.pdf>)

ウ) 国内消費

年間の切り花購入額は平成9年をピークに長期的に減少傾向が続いている。

これはライフスタイル等の変化により花と接する機会が少なくなったことや、冠婚葬祭などのイベントの規模縮小、華道人口の減少などが要因であると推察される。

<切り花1世帯当たりの年間購入額の推移>



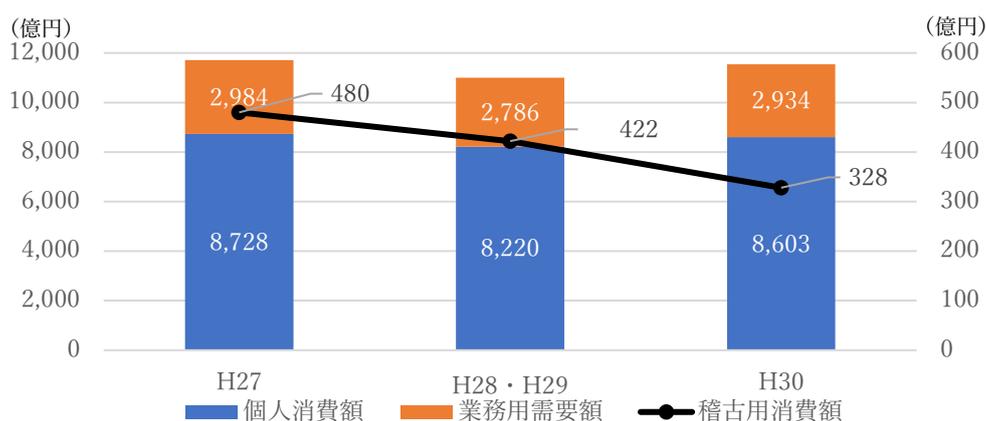
出典：農林水産省「花きの現状について 令和2年11月」

(URL:<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-77.pdf>)

直近の花きの国内消費額のデータでは個人消費額、業務用需要額ともにおよそ横ばいである一方、稽古用消費額は減少している。

<花きの国内消費額>

データ出典年	個人消費額	業務用需要額	業務用需要のうち稽古用消費額
平成27年	8,728億円	2,984億円	480億円
平成28年・29年	8,220億円	2,786億円	422億円
平成30年	8,603億円	2,934億円	328億円



出典：農林水産省「花きの現状について令和2年11月」

(URL:<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-77.pdf>) 及び、農林水産省「花きの現状について 令和元年12月」

(URL:https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/pdf/1912_meguzi_all.pdf) を参照し受託事業者が作成した。※上記表及びグラフは、「家計調査年報」、「社会生活基本調査」、「特定サービス産業実態調査」の統計データをもとに推計が行われている。また複数の統計資料を用いて推計しているため、H28・H29はまとめて1つのデータとして整理されている。なお表及びグラフにある稽古用は華道のための稽古用とは限らない。

(3) 課題

ア) 花材の確保について

近年の流通技術の進歩は、花きにおいても規格やロットのとりまとめといった効率性を求めている。一方、一部花材については、特に自然体が求められるものがあり、現在、一般的な消費者市場から求められている品質とは乖離した部分がある。こういった花材のニーズは十分に生産者に伝わっておらず、むしろ、生産現場では規格に適合しないものとして、廃棄されている可能性が高い。生花店の中には、枯れのある葉や市場規格外の要望があった場合も、生産者との連携で入手を目指すべく取り組んでいる店もあるが、その体制を恒常的に維持することには課題がある。

また、ニーズをくみ取り、生産したとしても、必要量が少量のためロットがまとまらないことや、規格品に比べ運送効率が悪いなど、効率性の悪さにより、華道現場が必要としている花材を積極的に栽培している生産者は少ない状況にある。

イ) 花材のニーズについて

花材で求められる品質は、一般に流通する規格の花きと異なる部分があり、その特性に関して生産者や流通業者の理解が必要となる。農林水産省では「平成 29 年度少量花材安定供給体制構築支援事業」において需要者（華道家・流派など）と供給者（生産者）、流通業者（生花店や卸売市場）が相互理解を行うことを目的に「いけばな花材マニュアル（栽培・出荷編）」を作成しており、需要者から必要とされている花材と、供給者が生産している花材をマッチングする方法を提示している。今後、このような相互理解の取組を進めていくことが、花材の安定的な供給体制の構築に不可欠なものと考えられる。

必要な花材の品目、特性や時期の情報が十分に生産者に伝わっていない現状を踏まえると、花きの生産者や販売者もそのニーズに関する情報共有と理解が必要であり、需要と供給のマッチングや、少量花材の販売がしやすい環境を整備していく必要があると考えられる。

ウ) 花き生産者について

花き生産量減少の要因として、生産者の高齢化や後継者不足、イノシシ、熊などの鳥獣被害などが挙げられる。花きの生産者の年代構成を見ると、45 歳未満の若い農業者の割合が稲作と比較して約 2 倍と高く、若い世代が活躍している現状もあるが、全体の生産者数は減少している。花きの場合にはほかの農作物と比べてより高い栽培技術が求められ、また、初期にかかる設備投資が高く、新規参入の障壁となっていることも課題である。

後継者の確保には花き生産者の身内が家業を継ぐことが考えられるが、花き業者へのヒアリングによると、現状は会社員などを志す人が多く、花きの生産が盛んな地域でさえ、20 年前と比べ生産者人口が半減している。

<参考>

- ・農林水産省「花きの現状について 令和元年 12 月」
(URL:https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/pdf/1912_meguzi_all.pdf)
- ・農林水産省「花きの現状について 令和 2 年 11 月」
(URL:<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-77.pdf>)

2. 花鋏

(1) 概要

流派によって使用する花鋏は異なり、大別すると柄が一重でその先がわらびのように丸くなっている「わらび手」と、柄の輪が大きい「つるの手」の2種類がある。

「わらび手」は、柄の先の部分が小さく丸まった形をしているものを指し、山菜の「わらび」の形に似ていることからこう呼ばれている。持ち手の端の小さな丸は硬い枝を潰す事で水の吸い上げをよくするために使用する。主に、池坊や草月流ではこの「わらび手」の花鋏を使用することが主流となっている。

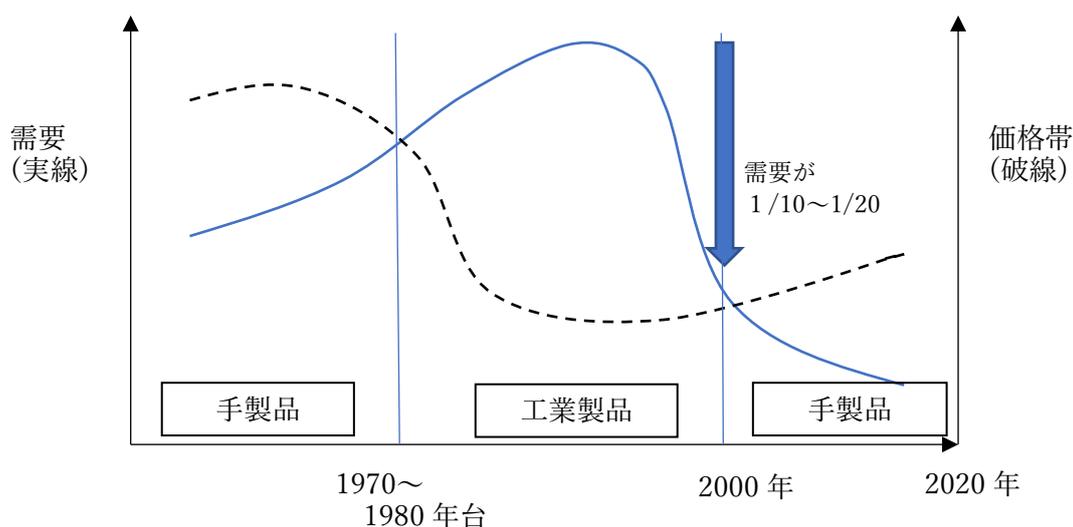
「つるの手」は、持ち手が輪になっているタイプで、断面の繊維をつぶさずに切る事ができ、水揚げに適している。主に古流系流派で使用されている。

(2) 現況

花鋏は、かつては鍛造や曲がり加工など伝統技術を用いて製造されたものが主流で、価格帯が数万円～十数万円のものも多く出回っていたが、1970年代に入って進んだ工業製品化の動きに伴い、切れ味という点では伝統技術を用いて製造されたものには劣るものの、手頃な価格（数千円台）で入手できる工業製品化された鋏の利用が急速に進んでいった。

一方、鋏業者へのヒアリングによると、花鋏の需要は、1990年代後半のピーク時と比べ10分の1～20分の1程度まで落ち込んでおり、市場規模の縮小に伴い、大量生産の採算が取れないことから、工業製品事業者の花鋏製造撤退が続き、近年、再び職人による手作りでの製造が主となっているようである。

なお、規模の大きい流派は以前、流派オリジナルの花鋏を使っていたこともあり、様々な種類があったが、現在では華道人口の減少に伴い、種類も減少している。



出典：製造業者へのヒアリング内容を基に受託事業者が作成した。

(3) 課題

ア) 花鋏の製造について

花鋏の製造は、市場規模の急激な縮小に伴い、スケールメリットが確保できる工業製品化の可能なものと、工業製品化に対応できないため職人により製造されているものが併存している状況にある。工業化されたものについては工場稼働に対応できる数量の確保、職人による製造については後継者不足という課題を抱えており、これらを踏まえると、近い将来、安定的な供給ができない状況になると考えられる。花鋏の型式についても、これまでは各流派の要請に応じ、様々な型式の花鋏が生産されていたが、今後は製造者の減少により、多様な型式の供給が困難となっていくことが懸念される。

イ) 後継者問題及び技術の継承について

打刃物の製造業者へのヒアリングでは、花鋏の製造期間は1本当たり1週間程度かかり、花鋏製造の職人の育成には最低約10年という長期間が必要とのことであり、現在の市場規模では、職人の育成費用もなく、後継者を雇わず技術の継承ができない状況とのことである。地域によっては国の支援を受けて産地組合が新規採用（育成事業）を行っている事例もあるが、この事例についても産地組合が一定の事業を行える規模等を維持することが必要となる。

3. 花留め（剣山）

（1）概要

花留めは花をさす際に、花が動かないように支える道具である。様式により花留めの道具は異なり、立華では込み藁、生花では又木、盛花では七宝などが用いられている。

口の広い花瓶においては、主となる花の脇に別の草や花などを添え支えることが行われており、下草留めと呼ばれる。束ねた藁などを用いて花を固定する方法も古くから行われており、込み留めと呼ばれていた。

室町時代から江戸時代にかけて華道の隆盛に伴い様々な花器が用いられるようになると、花留めも様々な種類が使われるようになった。一般的には七宝留めと呼ばれる穴のあいた金属板が用いられ、時には扇子や花鋏が花留めとして使われることもあった。

明治時代に入ると、多数の針を束ねた今の形状の剣山が登場し、使い勝手の良さもあり広く普及した。

（2）現況

既出のように、明治時代に入ると剣山が開発され、藁や又木等から剣山へ置き換わっていった。藁や又木は自然物であり、近年、入手困難になっていることや再利用が難しいため、現在では剣山や樹脂、プラスチック等を素材とした工業製品への置き換えが進んでいる。

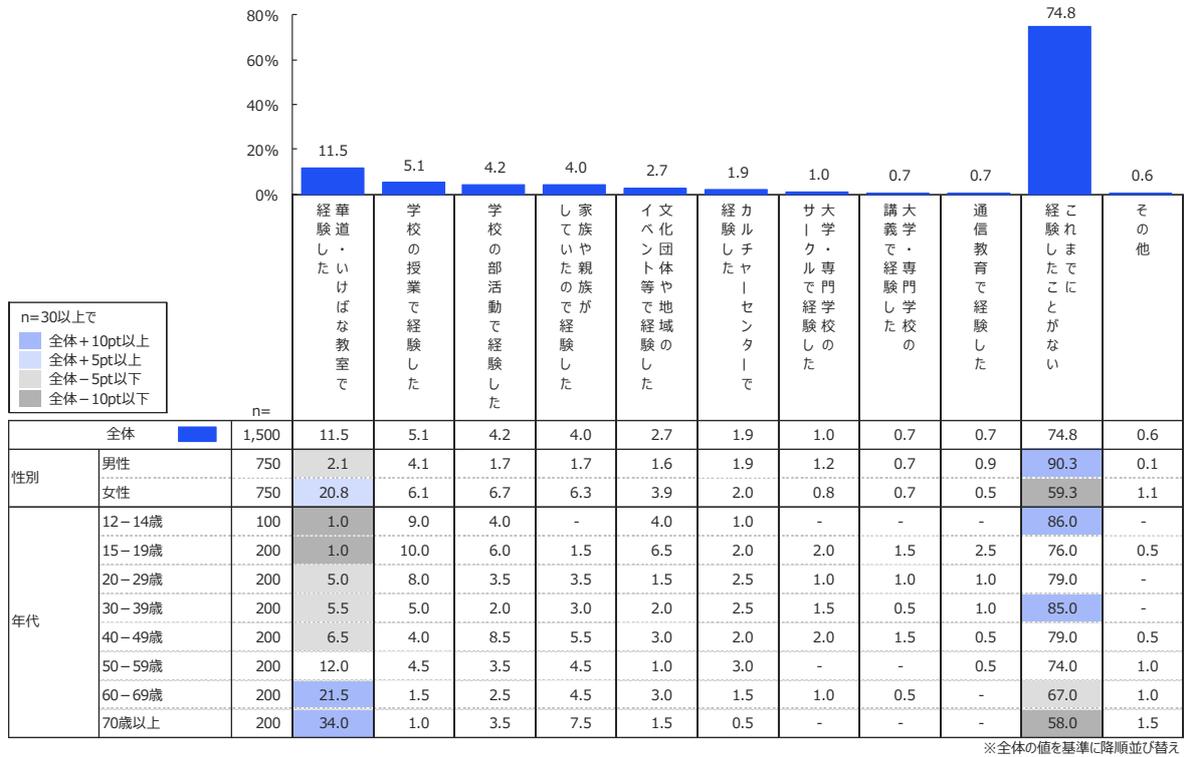
一方、道具業者へのヒアリングによると、近年の需要減少に伴い、工業製品事業者の廃業等が進んでおり、例えば剣山は職人による手作りの製造割合が増えているようである。

（3）課題

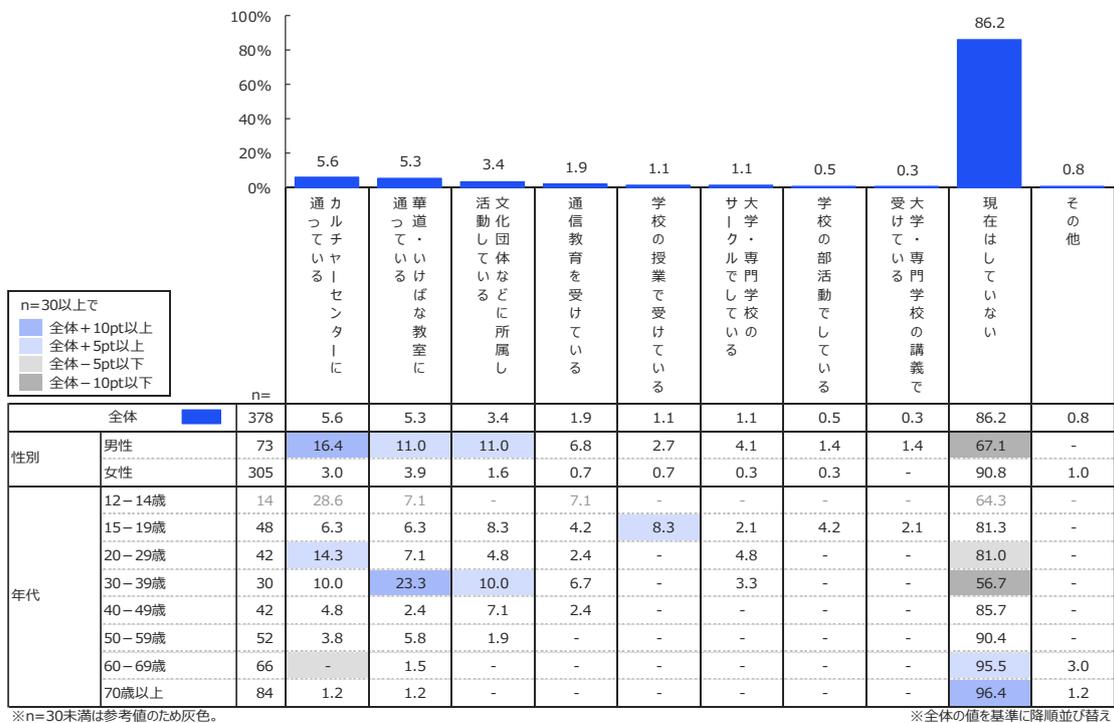
規模の大きい流派から製造を依頼されている事業者以外で専門メーカーと呼ばれる事業者は少ない。各道具について、製造メーカー間の残存競争が続いている一方、後継者問題等により廃業に至るところも散見されている。製造や加工に係わる職人の確保や技術の維持継承も喫緊の課題となっており、今後、安定的な供給、多様な種類の供給が困難になっていくことが懸念される。

参考資料 国民意識調査の結果

Q1：過去の華道経験・経験内容【全調査対象者への設問・複数回答】



Q2：現在の華道経験・活動内容【華道経験者への設問・複数回答】



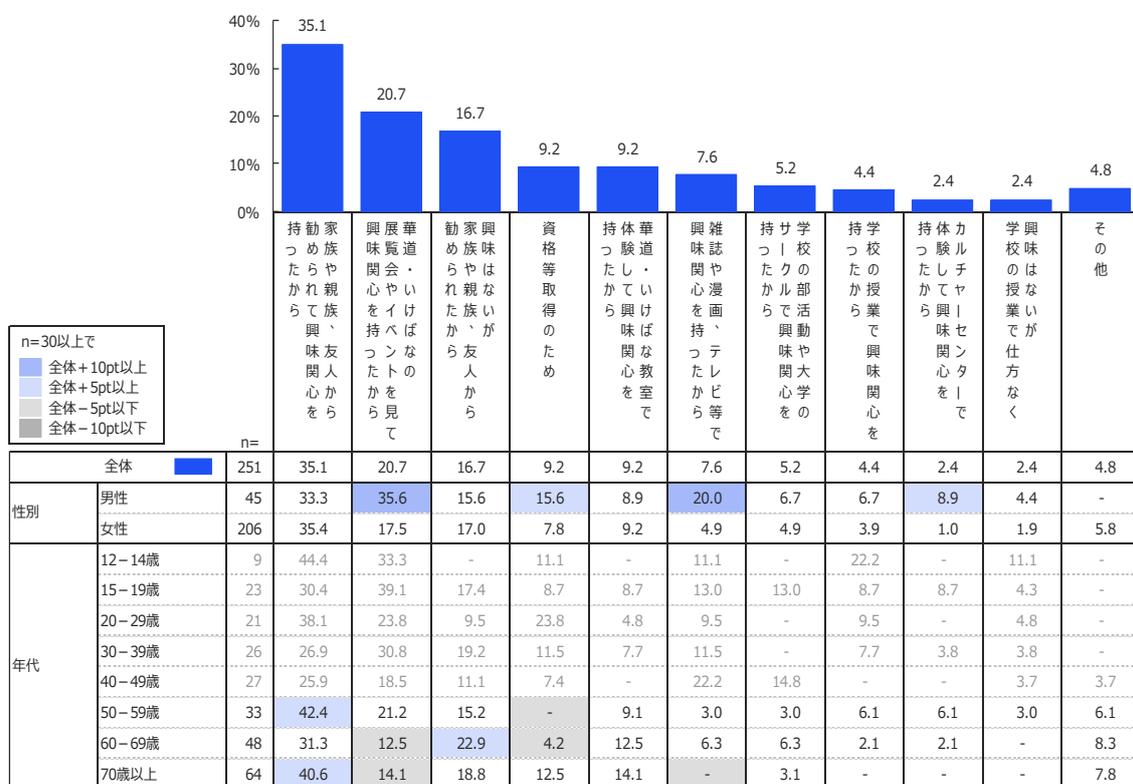
Q3：華道をやめている理由【華道経験者で現在華道活動をしていない人への設問】

(%)

		興味関心が無くなったから	教室等に通い(資格取得など)目標を達成できたから	学業・仕事が忙しくなったから	家事や介護などで時間が取れなくなったから	経済的な余裕が無くなったから	他に趣味やお稽古などを始めたから	環境が変わり、華道・いけばなを続けられなくなったから	学校を卒業したため、する機会が無くなったから	その他		
n=												
全体		326	24.5	5.5	12.3	4.9	6.4	10.4	19.3	14.4	2.1	
性別	男性	49	30.6		14.3	2.0	6.1	8.2	10.2	26.5	2.0	
	女性	277	23.5	6.5	11.9	5.4	6.5	10.8	20.9	12.3	2.2	
年代	12-14歳	9	22.2	11.1		22.2		11.1		33.3		
	15-19歳	39	30.8		23.1		5.1	7.7		33.3		
	20-29歳	34	29.4		11.8	2.9	17.6		5.9	32.4		
	30-39歳	17	5.9	23.5	11.8		23.5		5.9	11.8	17.6	
	40-49歳	36	22.2		19.4		11.1	8.3	16.7		19.4	2.8
	50-59歳	47	27.7	2.1	12.8		8.5	2.1	34.0		12.8	
	60-69歳	63	27.0		7.9	6.3	7.9	6.3	17.5		22.2	1.6
	70歳以上	81	21.0		14.8	6.2	4.9	2.5	16.0		25.9	3.7

※ n=30未満は参考値のため灰色

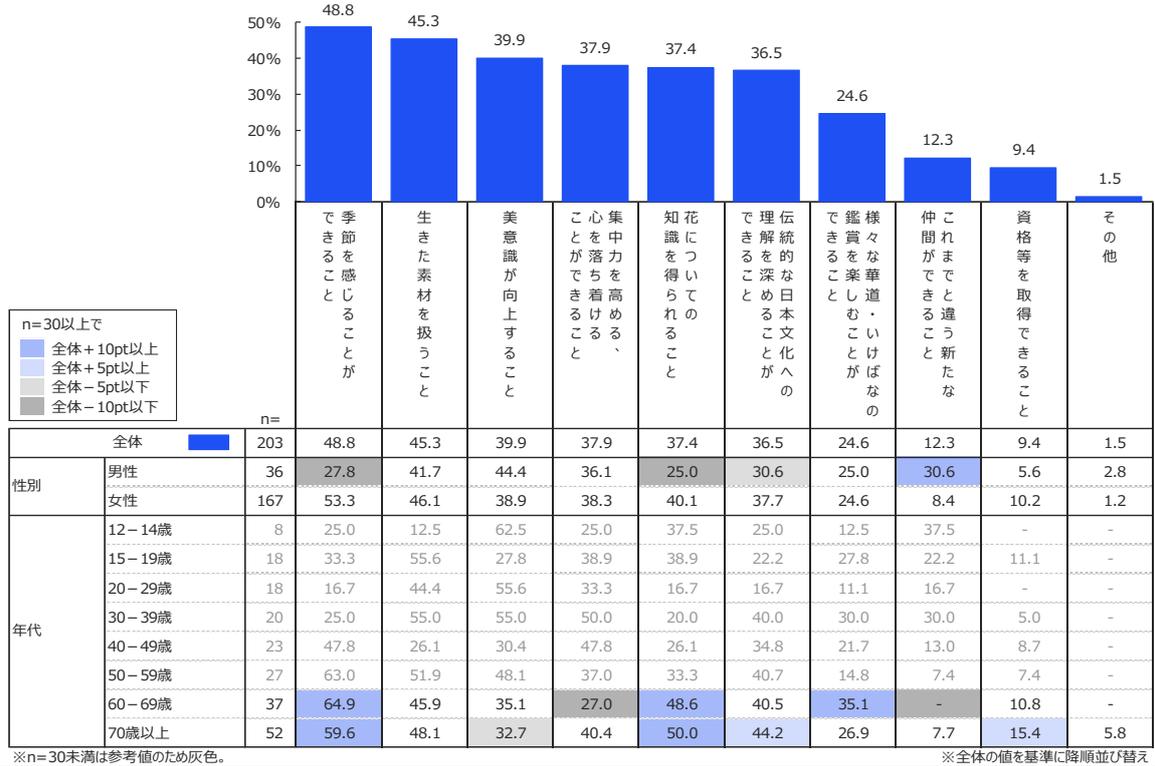
Q4：華道をはじめたきっかけ【華道経験者(興味関心がなくなった人、あるいは、学校を卒業し現在華道活動をしていない人を除く)への設問】



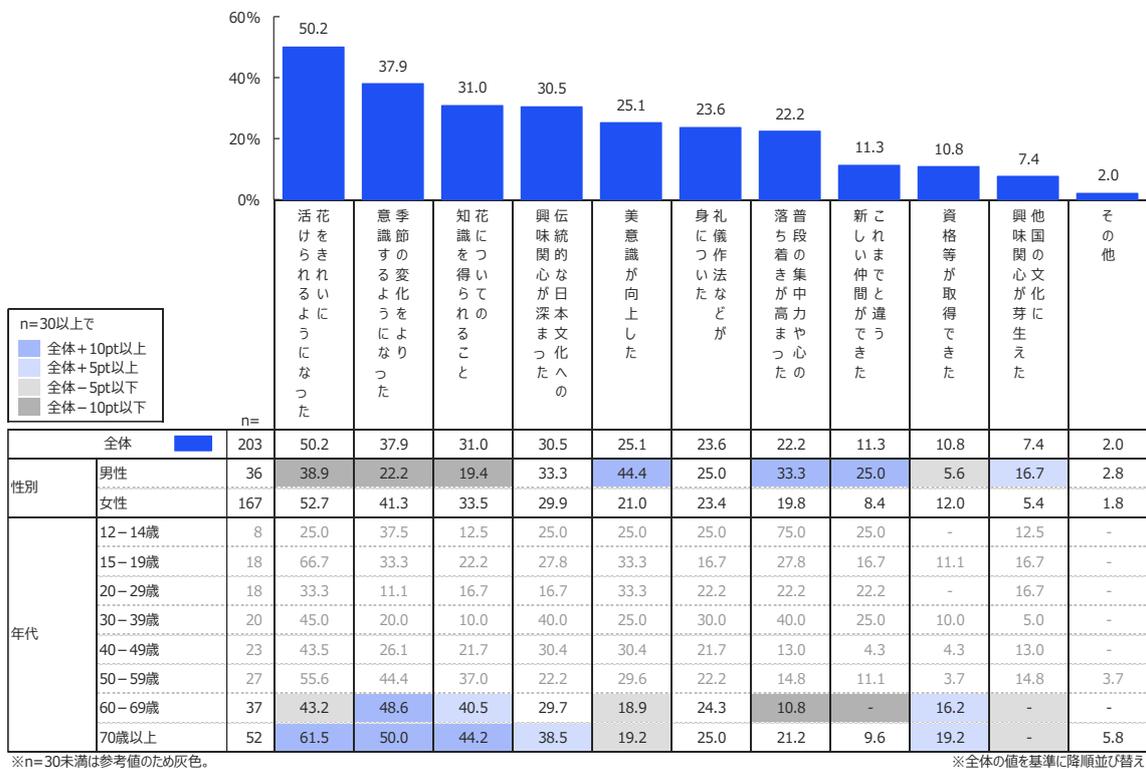
※n=30未満は参考値のため灰色。

※全体の値を基準に降順並び替え

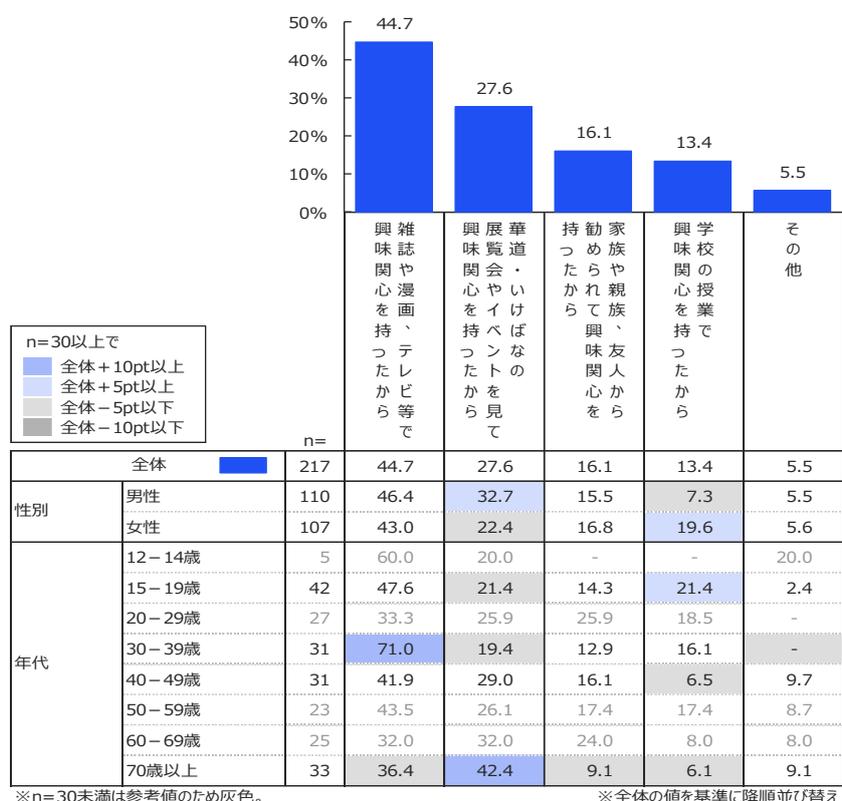
Q5：華道の魅力・面白さ【華道経験者(興味関心がなくなった人、学校を卒業し現在華道活動をしていない、仕方なく学校の授業でやっている人を除く)への設問】



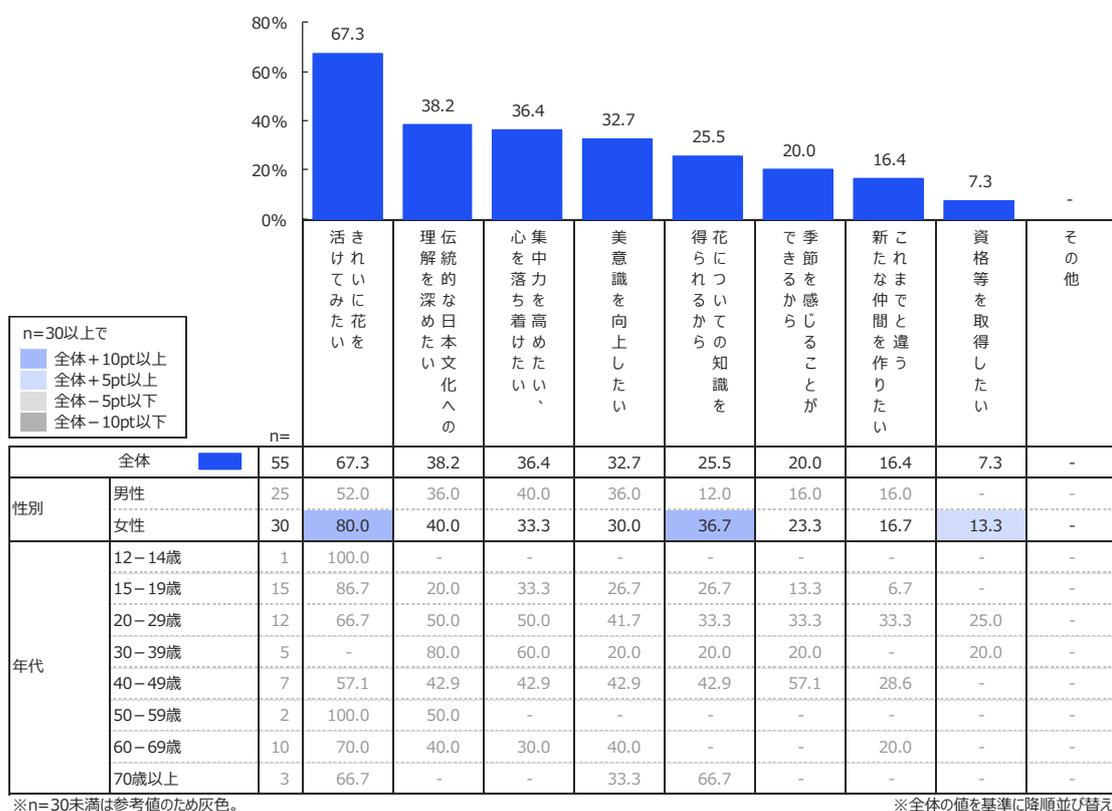
Q6：華道をすることで得られるもの【華道経験者(興味関心がなくなった人、学校を卒業し現在華道活動をしていない、仕方なく学校の授業でやっている人を除く)への設問】



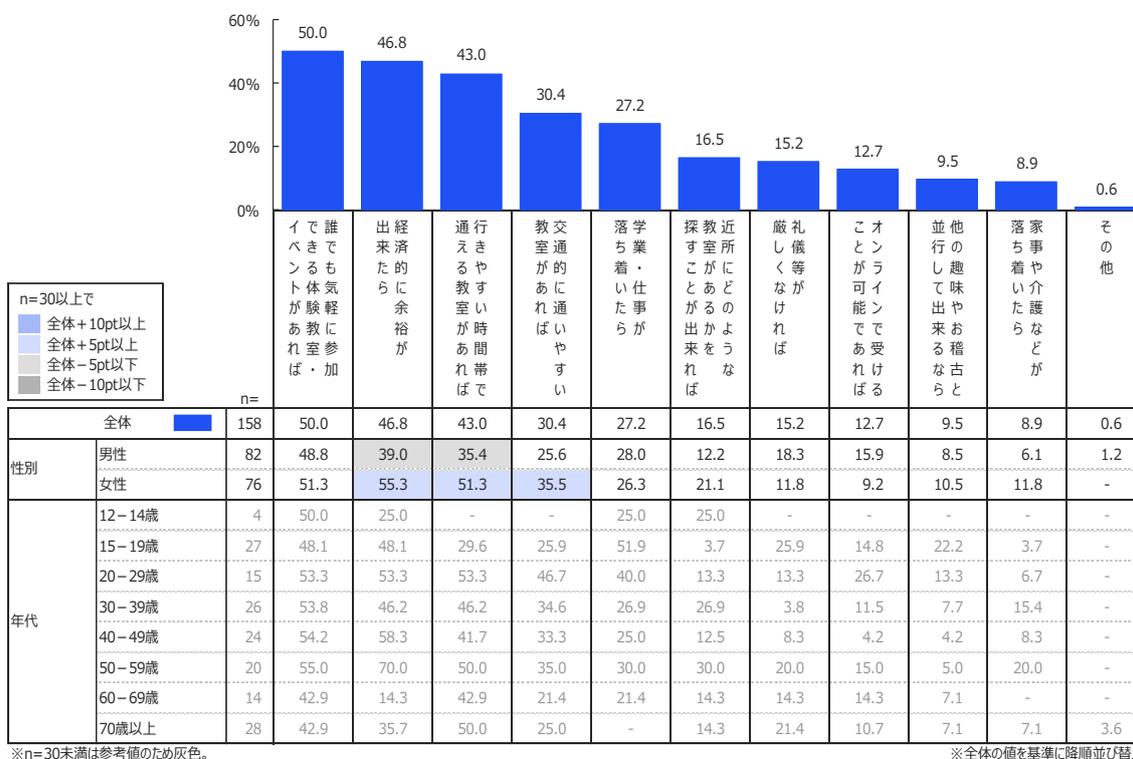
Q7：華道への興味関心をもったきっかけ【華道未経験者あるいは華道経験者で学校を卒業し現在華道活動をしていない人で華道に興味関心がある人への設問】



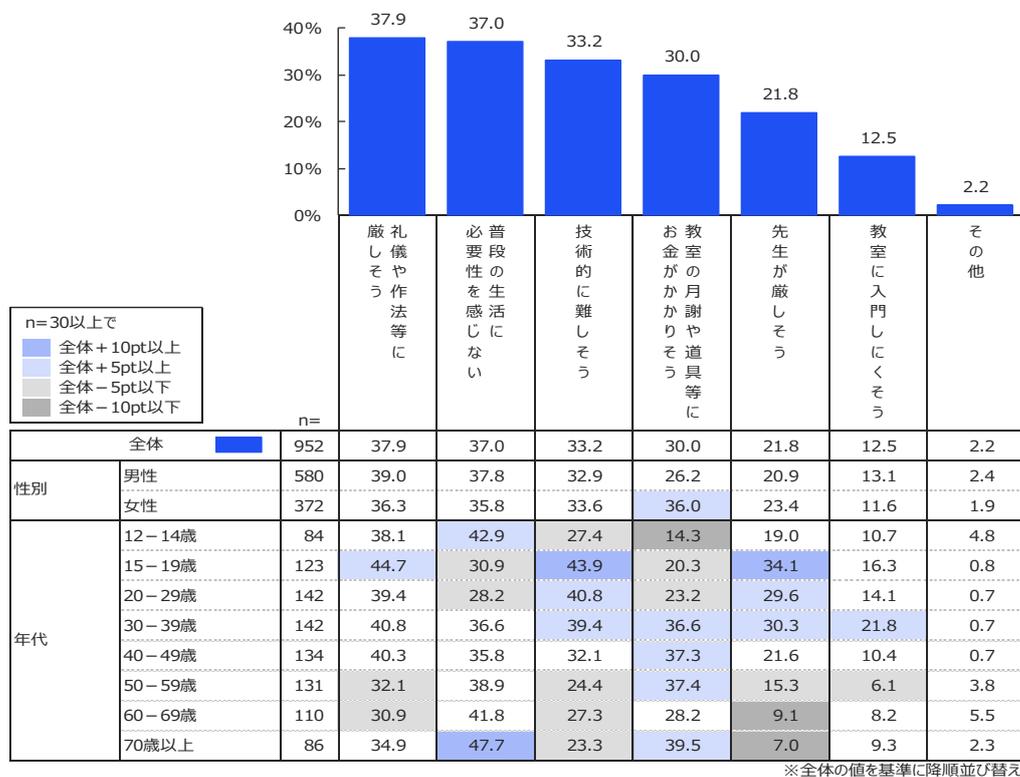
Q8：華道をやってみたいと思う理由【華道未経験者あるいは華道経験者で学校を卒業し現在華道活動をしていない人で華道に興味関心がある人への設問】



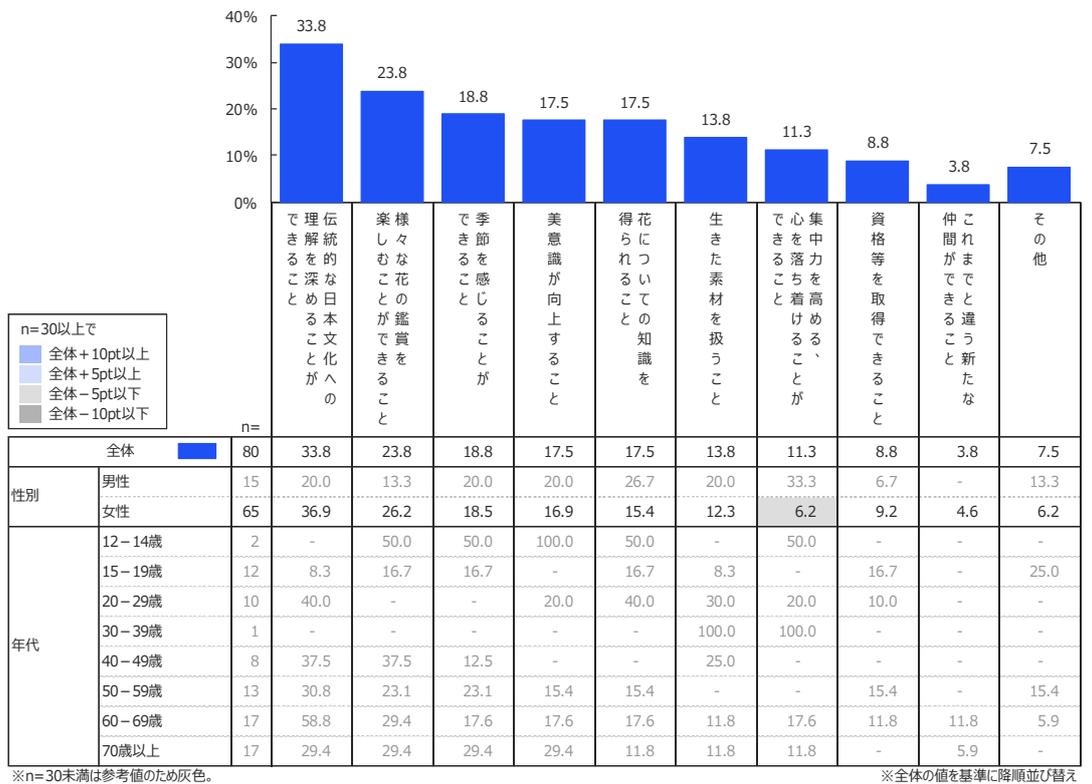
Q9：華道意欲がある人のハードル【華道未経験者あるいは華道経験者で学校を卒業し現在華道活動をしていない人で華道に興味関心があり、条件等が整えば華道活動をしたい人への設問】



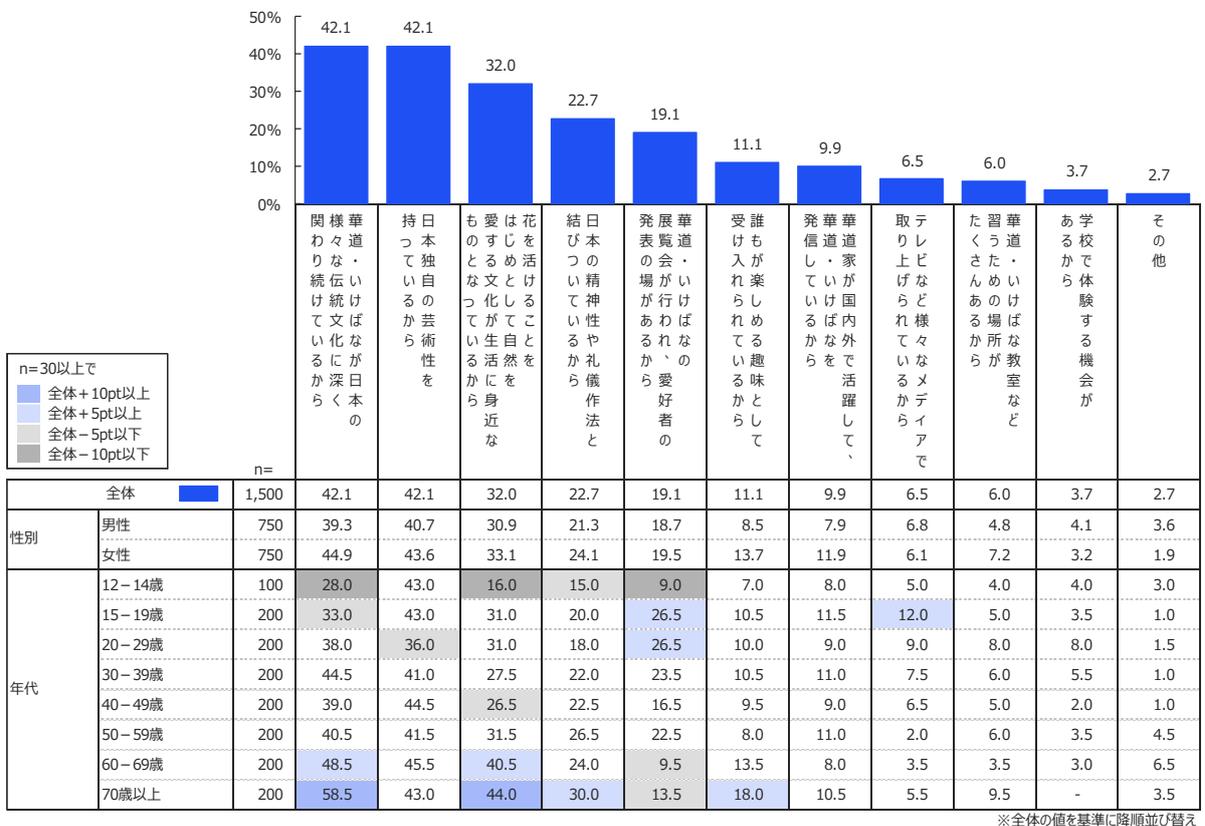
Q10：華道に対する印象【華道未経験者で華道に興味関心がない、あるいは華道経験者で学校を卒業し現在華道活動をしていない人で華道に興味関心がない人への設問】



Q11：華道をやめた人が当初持っていた興味関心【華道経験者で現在華道活動をしておらず、華道に興味関心がなくなった人への設問】



Q12：華道が現在まで引き継がれている理由【全調査対象者への設問】



参考資料 華道団体等アンケート調査配布先

No.	団体名	No.	団体名	No.	団体名
1	青葉流	35	梶井華道会	69	古流松寿会
2	明美古流一鏡会	36	梶井宮御流	70	古流松静会
3	浅草遠州一濤流	37	佳水流	71	古流松扇会
4	東古流	38	春日古流	72	古流松縁会
5	新田目流	39	春日流瓶花	73	古流松創会
6	有川式いけ花	40	桂古流	74	古流松東会
7	郁生流	41	桂古流・桂流	75	古流松濤会
8	池坊敬月流	42	華道瑩心流	76	古流松藤会
9	池坊正流	43	京都古流	77	古流松桃会
10	池坊宝生流	44	京葉古流	78	古流松濤派
11	池坊清月派	45	旭翠流	79	古流松鳳会
12	いけばな雪舟流	46	きらら会	80	古流松峰会
13	いけばな白鳳会	47	錦花池坊	81	古流松葉会
14	池坊系真流	48	錦春古流	82	古流松麗会
15	池坊明流	49	錦城古流	83	古流清光会
16	五十鈴古流	50	月豊古流・青風流	84	古流聖心会
17	五十鈴古流一暁派	51	広山流	85	古流せいりゅう会
18	五十鈴古流静花会	52	宏道流（望月）	86	古流清和会
19	五十鈴古流晴美会	53	宏道流（渡邊）	87	古流草榮流
20	一葉式いけ花	54	光美古流	88	古流・大観流
21	一香流	55	光風流	89	古流竹真会
22	一翠古流	56	光風流（山本）	90	古流東洋会水墨花点前
23	一草流	57	国際華道如心流	91	古流松の会
24	映月松風流	58	国風華道会	92	古流理苑会
25	MOA 山月光輪花	59	弧篷遠州流	93	古流理恩会
26	遠州流一森会	60	古流庵家会	94	古流わかば会
27	遠州流（岩本）	61	古流華山流松公会	95	四方面式古流
28	遠州流松華会	62	古流かたばみ会	96	秀抱流
29	遠州流（萩原）	63	古流華耀会	97	春草流
30	遠州流むさし野派	64	古流桔梗会	98	松花古流
31	櫻花遠州流	65	古流松映会	99	松月古流
32	桜月流	66	古流松應会	100	松月古流松宗会
33	桜陽古流	67	古流松月会	101	松幸古流
34	花芸安達流	68	古流松光会	102	松生派

No.	団体名	No.	団体名	No.	団体名
103	上代古流	139	藤栄流	175	池坊佳月式
104	正風流	140	道風流	176	五景花栄心
105	正宝古流	141	東和華道	177	石田流
106	松峰古流	142	都泉古流	178	華道一生本流
107	真月池坊	143	日新流	179	一生流
108	真生流	144	日本華道院	180	遠山流
109	真流青山流	145	日本華道学会	181	遠山流馨月会
110	新未生流	146	日本古流	182	遠州
111	翠月古流	147	八代古流	183	遠州御殿流
112	水心流	148	花古流	184	小原流
113	翠蒲流	149	東池坊	185	御室流
114	駿東流	150	東山源氏千家古流	186	温故流
115	清香古流・清香流	151	聖池坊	187	岳松御流
116	星月古流	152	美風池坊	188	華月流
117	成月流	153	芳月流	189	佳紅流
118	清紅流	154	北斗流	190	佳生流
119	清泉古流	155	本原遠州流	191	華道高野山
120	清風瓶華	156	本草流	192	華道真養未生
121	青蘭流	157	松葉流古流	193	華道創心流
122	雪洲流	158	宮内流	194	華道日本未生
123	千家古流一陽会	159	都池坊	195	華道本能寺
124	千家古流(田津原)	160	都古流	196	花道みささぎ流
125	千家古流芙蓉会	161	都古流一孝会	197	華道洛陽未生流
126	千家生花	162	柳古流	198	閑瀨流
127	洗心流	163	大和池坊	199	喜堂未生流
128	宣法未生流	164	利休古流	200	京都未生流
129	相阿彌流	165	利休古流栄光会	201	桑原専慶流
130	草華流	166	大和花道	202	景風流
131	双真古流	167	いけばな龍生派	203	甲州流
132	草心自由花華講会	168	麗華風	204	光風未生流
133	草月流	169	麗月流	205	小松流
134	艸心流瓶華	170	和光古流	206	いけばな嵯峨御流
135	創美流	171	和様花道	207	紫雲華
136	草楓流	172	鶺鴒御流	208	信貴山真華流
137	竹青華道会	173	斑鳩流	209	司山流
138	傳承瓶花	174	池坊	210	士峰流

No.	団体名	No.	団体名	No.	団体名
211	蕉月流	247	都未生流	283	遠州秀月流
212	生真流	248	大和未生流	284	池坊寿美華流
213	新池坊	249	幽雅流	285	湖秀流
214	新生流	250	容真流	286	古流香和会
215	翠香流	251	洛陽未生流	287	松月堂古流闘華
216	清生流	252	いけばな京花傳	288	新桂古流
217	専慶流	253	池坊聖流	289	勅使河原和風会
218	専敬流	254	一光流	290	東華古流
219	千秋流	255	春日流	291	松煌古流
220	先春流	256	華道草照流	292	専心池坊
221	華道専正池坊	257	華道美生流	293	成和御流
222	千風未生流	258	古流吉野派	294	華道桂未生流
223	草真流	259	沙羅の会	295	華道遠州宗家
224	創生流	260	勝山遠州流	296	古流松庭派
225	知香流	261	松南古流	297	古流草翠流
226	月輪未生流	262	新生	298	古流松照会
227	藤院未生流	263	静月古流	299	いけばな和泉会
228	東山未生流	264	聖風流	300	洗心古流
229	梅月流	265	千勝古流	301	拈華観音流
230	八代流	266	宝山流	302	香風流
231	二葉流	267	萬葉流	303	御幸遠州流
232	文房流	268	源古流	304	池坊清流
233	峯月流	269	松風花道会	305	池坊大和派
234	芳山流	270	松月堂古流	306	古流松慶会
235	峰風遠州流	271	桂式・桂古流	307	古流桜会
236	三先御流	272	華道美生流研究会	308	柴山古流緑山流
237	未生御流	273	孤蓬遠州流生花	309	いけばな翔映会
238	未生真養流	274	古流松正派	310	古流茂風会
239	未生流	275	石州流	311	公益財団法人日本いけばな芸術協会
240	未生流（庵家）	276	細川未生流	312	一般社団法人日本華道連盟
241	未生流一宗会	277	祥院未生流	313	西日本華道連盟
242	未生流大阪	278	池坊新華	314	一般社団法人いけばなインターナショナル
243	未生流笹岡	279	池坊鳳秀流 長田鳳秀	315	一般社団法人帝国華道院
244	未生流（総家）	280	いけばな松風	316	日本いけばな懇話会
245	未生流中山文甫会	281	いけばな潭桂流		※順不同
246	神園流	282	遠州古流和松会		

令和2年度 生活文化調査研究事業(華道) 報告書

発行日 令和3年3月31日

発行 文化庁 地域文化創生本部事務局

〒605-8505

京都府京都市東山区東大路通松原上る三丁目毘沙門町43-3
